―― 文部科学省選定 (平成24年度~ 26年度) —― 「産業界のニーズに対応した教育改善·充実体制整備事業」

産業界と学生を"つなぐ" 教育プロジェクト

事業報告書



北陸の短大では金城だけ

「産業界のニーズに対応した教育改善·充実体制整備事業」に 北陸の短大で唯一の選定を受けました。



目 次

Ι.	巻頭言	学長 加藤 真一	1
Π.	平成 24	~26 年度 総括	2
Ш.	各部会の	か概要	9
	1. 学生^	への教育改善・充実(学科別の取組)	
	【ビジネス	ス実務学科】	
	(1)	アクティブラーニングの導入による汎用能力と専門能力の養成強化	9
	(2)	産学連携ゼミナールによる考察力・発信力・チームワーク力の養成強化 …	16
	【幼児教育	育学科】	
	(1)	「育ちプログラム」による学生の人間関係力の向上	29
	(2)	地域との連携強化によるフォローアップ講座の充実	35
	【美術学科		
	(1)	自活のためのビジネス教養と専門教養の涵養	42
	(2)	産業界からの要請に対する提案取組	50
	2. 教育改	改善・充実を支える人的体制の整備(全学共通の取組)	
	(1)	教職員のファシリテーションスキルの養成	57
		「教職員インターンシップ」による教育改革力の向上	
		「親学通信」「保護者サロン」の活用による保護者の教育力向上への支援	
IV.	「産学連	携人材育成研究会」の概要	80
V .	まとめ・		84

I. 巻頭言

学長 加藤 真一

平成24年、中央教育審議会がとりまとめた「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力をはぐくむ大学へ」において、予測困難な今の時代、若者や学生の「生涯学び続け、どんな環境においても"答えのない問題"に最善解を導くことができる能力」の育成が求められた。そして、そのための教育方法の改善として、学習者の能動的な学習参加を取り入れた「アクティブラーニング」等の導入が推奨された。

金城大学短期大学部が取り組んできた「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」では、「アクティブラーニングを活用した教育力の強化」をテーマに掲げ、いち早くこの「アクティブラーニング」の導入を目指してきた。学習支援体制を整備しつつ、ファシリテーションスキルを磨く研修を幾度となく開催し、授業の改善を図り、3年間で大きな成果をあげてきたことは、この報告書に記されているとおりである。

アクティブラーニングの活用と並び、もう一つ掲げたテーマは「地域・産業界との連携力の強化」であった。産業界から 25 人もの委員就任をいただいて設置した「産学連携人材育成研究会」により、地域とのつながりは大いに強化され、9部会の取組を展開する中で様々なご支援をいただくことができた。折りしも平成 26 年 12 月、国が定めた「まち・ひと・しごと創生総合戦略」において、地方大学等は「地域とのつながりを深め、地域産業を担う人材養成など地方課題の解決に貢献する取組を促進する必要がある」と記された。この研究会を実質的に運営できたことで、本学が今後さらに地方創生に向けた取組を進めるにあたり、大きな礎を築くことができたと自負している。

さて、本事業では、上記の2つのテーマに取り組む上で、成功事例と失敗事例の共有を図ってきた。特に、失敗事例は批判することなく、原因を分析し、状況を把握して、その知識化を試みた。新しい取組を始めると、しばしば予想困難な出来事に遭遇する。多少の失敗は避けられない。「答えのない問題に最善解を導くことができる能力」は、試行錯誤の繰り返しの中で身につくものであろう。これは学生だけでなく、われわれ自身にも言えることである。本学は平成28年に開学40周年を迎える。これまでの歴史と伝統を生かしつつ、地域社会の多様なニーズに対応した教育改善を、今後とも追求し、推進していきたいと考えている。

最後に、この事業に対して多大なご支援をいただいた方々に厚く御礼を申し上げるとともに、 今後も全教職員が一丸となって更なる教育活動の充実に向け邁進することを誓い、関係各位の一 層のご指導とご協力をお願いしたい。

Ⅱ. 平成24年度~26年度 総括

取組責任者 岡野絹枝

1. 取組の概要

文部科学省支援事業「産業界ニーズ GP」(略称)は、これまでのような大学単独事業ではなく、全国を8ブロックに分けた壮大なプロジェクトである。本学が位置している中部ブロックにおいては、中部圏 23 大学 (18 大学及び 5 短期大学)の連携による「中部圏の地域・産業界との連携を通した教育改革力の強化」という大きな取組名称の中で本事業を展開することとなった。

中部ブロックでは、「①アクティブラーニングを活用した教育力の強化」と「②地域・産業界との連携力の強化」という2つのテーマのもと、「1.前に踏み出す力」、「2.考え抜く力」、「3.チームで働く力」という「社会人基礎力」を、学生に求める能力とすると同時に、この取組を遂行する大学自体に対しても求める能力とした。

本学は、これまでいくつもの「Good Practice (GP)」に挑戦して選定され、教育改革に取り組んできたが、今回初めて全学的な取組となり、「産業界と学生を"つなぐ"教育プロジェクト」と銘打って、学生に対しては3学科それぞれの特色を生かした事業を推進してきた。また、学生のより良い教育を支えるために、教員の能力向上に加えて、事務職員も教育に携わる一員として教員と共に参画する「教職協働」を組み入れた。更には、保護者の教育力向上への支援を図る取組も組み入れた。

これらの取組を 9 部会に分け、「産学連携人材育成研究会」の産業界委員と本学の担当者が協力して取り組む仕組みを構築した。平成 25 年度に入り、これが本格的に稼働し始めた。各部会が定期的に会議を開く、産業界委員の企業・団体等が学生の受け入れ先となる、産業界委員が出講し学生に講話するなど、産業界委員の積極的な支援のもと、まさしく「産学連携」による取組実践になった。 3 年目の平成 26 年度には、PDCA サイクル改善を経て、それぞれの取組が、各学科、教職員、保護者に対して必要不可欠な教育事業として定着するに至った。

2. 平成24年度~26年度の成果

「①アクティブラーニングを活用した教育力の強化」と「②地域・産業界との連携力の強化」という2つのテーマのもと、本学では、「産業界と学生を"つなぐ"教育プロジェクト」を掲げ、「前に踏み出し、考え抜き、チームで社会と結びつく教育」を推進するため、「学生への教育改善・充実」及び「教育改善・充実を支える人的体制の整備」に関する取組担当部署を9つ設け(「部会」と称する)、それぞれの課題に取り組んできた。

結果、以下の成果をあげることができた。

(1) 学生への教育改善・充実(学科別の取組)

①アクティブラーニング導入による汎用能力と専門能力の養成強化(ビジネス実務学科)

アクティブラーニング手法の導入、クリッカー活用、インターンシップの促進などを通じて、社会人基礎力の基本的汎用能力と共に、専門的実務知識・技能に関する学修向上を図ることができた。

②産学連携ゼミナールによる考察力・発信力・チームワーク力の養成強化(ビジネス実務学科) 「産学連携ゼミナール」を通じて、地元産業界や白山市などとの連携強化を図り、「金城ビジネス学会」に向けての研究やプレゼンテーション学修の中で、考察力・発信力・チームワーク力という社会人基礎力の養成を強化することができた。

③育ちプログラムによる学生の人間関係力の向上(幼児教育学科)

様々なワークショップやグループワークを体験することで、コミュニケーションについて 学び、人間関係に対する気づきやスキルを体得し、対人関係力の成長につなげることができ た。

④地域との連携強化によるフォローアップ講座の充実(幼児教育学科)

産学連携強化を図りながら、先輩保育者とのディスカッションやグループワークを通して、保育現場での主体性、考察力、チームワーク力などの保育に関する専門力を高めることができた。

⑤自活のためのビジネス教養と専門教養の涵養 (美術学科)

コミュニケーションワークショップやアート研修を体験し、「金城アートショップ」の企画・ 運営に取り組むことで、ビジネス教養と専門教養についての意識を高め、社会的・職業的自 立心の養成を図ることができた。

⑥産業界からの要請に対する提案取組(美術学科)

産業界からの要請をもとに、美術学科の方から積極的にデザイン提案を行うことで、制作力に加え、企画力や提案力、ブランディング能力やプレゼンテーション能力を強化することができた。

(2) 教育改善・充実を支える人的体制の整備(全学共通の取組)

⑦教職員のファシリテーションスキルの養成

「ファシリテーションスキル養成研修会」の定期開催を通じ、教職員のスキル向上を図り、 授業の改善や学生とのコミュニケーションに活用できるようになった。また、地域・産業界 にも研修の機会を提供し、相互の教育力向上を促すことができた。

⑧教職員インターンシップによる教育改革力の向上

地元産業界の支援により、「研修等参加型」「現場体験型」の両方を教職員が体験することで、 社会が必要とする人材資質への理解を深め、産業界のニーズを把握することにより、教育改 革力の向上を図ることができた。

9保護者の教育力向上への支援

「キャリア親学通信」の定期的な発行により、保護者が必要としている情報をタイムリーに届けることができた。また、「保護者サロン」では、ブログ更新の充実や Web を使った交流を図り、保護者の教育力向上を支援することができた。

3. 平成24年度~26年度の評価結果

3年間の取組に対する評価については、選定大学 23 校の共通指標に基づいた自己評価が義務づけられたが、本学においては、自己評価に留まらず、地元産業界を代表する委員による「第三者評価委員会」を設けて客観的な評価も仰いだ。なお、自己評価については、各部会からの事業評価、産業界委員からの評価・コメント、学生アンケートなどから、極力客観的なデータ収集に努めて測ったものである。

(1) 自己評価結果

(1) アクティブラーニングを活用した教育力の強化

○平成26年度末までの目標:

各教員がファシリテーションスキルを身につけ授業の運営に活かす。また、クリッカーの利用方法を学び、授業の双方向性を高める。

○平成 24 年度~26 年度評価: 3 [指標は以下の通り]

〈評価指標〉

1:目標に向かってスタートした――全教員がファシリテーションスキルやクリッカーの活用方法を学び始めた。

2:目標に近づいた――3分の2の教員が上記のスキルを、授業に使い始めた。

3:目標に達した―――上記スキルを活用し、すべての教員がアクティブラーニング を取り入れた。

4:目標を上回った――アクティブラーニング型の授業について、授業アンケートによる評価が向上した。

(2) 地域・産業界との連携力の強化

○平成26年度末までの目標:

「産学連携人材育成研究会」を立ち上げ、学内に設置する9部会それぞれが部会のメンバーを交えた会議を通じて、より効果的な連携方法を検討し、実行に移す。

〇平成 24 年度~26 年度評価: [指標は以下の通り]

〈評価指標〉

1:目標に向かってスタートした――「産学連携人材育成研究会」を立ち上げ、学内に9部会を設置し、産業界のニーズを把握した。

2:目標に近づいた――各部会が部会会議などを通じて産学連携の具体的な方策を検討した。

3:目標に達した―――各部会において検討された具体的な方策を実行に移した。

4:目標を上回った――実行に移した具体的な連携活動の結果を反省し、さらなる改善策を検討した。

(2)「第三者評価委員会」による評価結果

平成27年2月23日に開催した「第三者評価委員会」において、以下の評価を得た。 評価委員(4人)は次のとおりである。

- •玉田善明(石川県中小企業家同友会 前代表理事)(玉田工業株式会社 代表取締役社長)
- ・西 和喜雄(社会福祉法人石川県社会福祉協議会 専務理事)
- ・加藤義裕(白山商工会議所 専務理事)
- ・吉森昭一(白山市企画財政部 企画課長)

〈評価指標〉(5段階) 5:とても良い 4:良い 3:ふつう 2:あまり良くない 1:良くない

(1) ビジネス実務学科の取組・・・ 4.5

- ・新しい手法であるアクティブラーニングを導入した授業を一層発展させるために ファシリテーションスキル研修に積極的に臨む姿勢から、教員の覚悟がうかがえる。
- ・インターンシップでは、事前面談の導入により、受け入れ側と学生のミスマッチ 防止に繋がっていることは大変すばらしいと感じる。今後、参加学生から役に立 ったスキルや知識、就職するまでに修得したい資格等の意見を収集・分析した結 果の活用に期待したい。
- ・「金城ビジネス学会」では、産学連携をもとにした発表が増加傾向にあることに成 果がうかがえた。
- ・企業人講話をさらに拡充し、学生との対談等も採り入れてはどうか。

(2) 幼児教育学科の取組・・・ 4.5

・コミュニケーションセミナー、親子との関わり体験等による人間関係力の向上の 取組をはじめ、社会人講話や卒業生との意見交換など、多様なプログラムの実践 により、学生は受講前と受講後で不安感が激減し、意欲が高まっている様子が見 える。また、卒業生にとっても仕事を継続していくうえでの励みになっている点 が大変良いと感じる。

(3)美術学科の取組・・・ 4.5

- ・学生の就職意識が高まるよう、企業見学をはじめ、メイクアップ講座、コミュニケーションワークショップ等、体験を主とした様々な取組は大変良いと感じる。 学生の就職活動に劇的な変化が起きるよう、更なる工夫を期待したい。
- ・民間企業や福祉施設等、多種多様なところからのデザイン依頼に対し、現場視察、 グループでの協議・制作、プレゼンテーションといった一連の流れで積極的に取 り組んだ成果物は、大変すばらしいものになっている。外部からの依頼が近年増 加傾向にあることからも、評判が上がっていることが見えるので、様々な機会を 捉え、ますます素敵な作品が制作されることを期待する。
- ・産業界への提案は、産学連携の原点の一つであり、更なる強化を期待する。

(4)教職員の取組・・・ 4.5

・アクティブラーニング手法を本格的に導入するにあたり、教員がファシリテーションスキルを修得する研修に取り組むだけでなく、教員と事務職員の合同研修も

継続実施した点が大変良い。また、3学科の教員間だけでなく、事務職員との理解も深まり、連携と協働を育む大きな力となっていることがうかがえる。更には、産業界の関係者も参加するようになり、これも定着していけば産学連携はますます強化されると思われる。研修内容がマンネリ化しないよう、新たな趣向を凝らしていくことが課題と考える。

・教職員が現場を知ることは極めて大切なことである。同時に教職員と企業人との 意見交換も大切である。教職員インターンシップが更に充実したものとなるよう 期待する。

(5)保護者への取組・・・ 4.5

・「キャリア親学通信」では、全学科対象、発行回数の増加、読みやすい構成等に努め、Web サイト「保護者サロン」においても全学科を対象にしたことや画面の見直し等、改良を重ねている点が大変良い。今後も利用状況の細かな分析のもと、保護者の視点に立った取組の更なる充実を期待する。

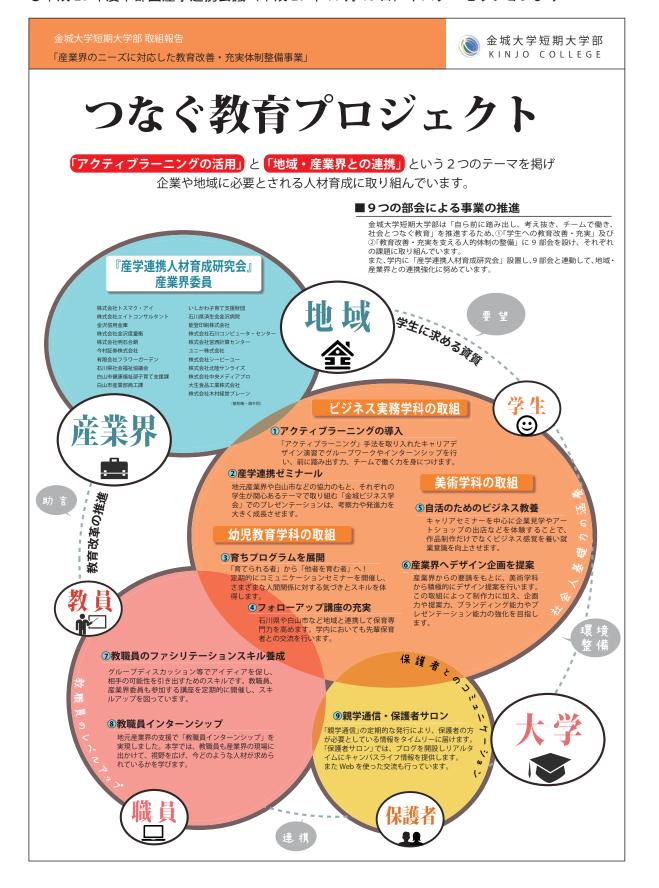
(6) 産学連携の推進・・・ 4.5

- ・産学双方がお互いのニーズを理解できるような流れができつつあるように感じる。 美術学科の提案のように、実際に目に見える形となっているものもあり、徐々に 成果として現れている。
- ・様々な場面で連携が強化されていることがうかがえる。

(7)総評

- ・この取組は、学生・産業界・教職員・保護者にとって大きな成果となっていることが随所にうかがえる。まさに「継続は力なり」であり、様々な課題を真摯に受け止め、連携・協働のもと、改善を重ねていくことが大変重要であることを改めて感じさせられた。
- ・全体的に進化していると思う。学生・教職員・保護者を対象に、地元企業の紹介、 PRができるような機会を設けられればいいと思う。本事業は今年度で終了となる ようだが、引き続き学生のため、地域のため継続できればよいと思う。

●平成 26 年度中部圏産学連携会議(平成 26 年 11 月 15 日)ポスターセッションより





金城大学短期大学部 KINJO COLLEGE

つなぐ教育プロジェクト 各部会取組内容と成果

つなぐ教育プロジェクトでは3学科9部会が、それぞれの課題に取り組みました。

■ 学生への教育改善・充実

	部会テーマ	取組内容	成果	
ビジネス	● アクティブラーニングの導 入による汎用能力と専門能 力の養成強化	学生の反応を瞬時に把握できる機器:クリッカーの利用 講習会を定期的に行っており、授業のアクティブラーニ ング化促進を図りました。	クリッカーを授業で利用する教員の割合は増加しており、授業を アクティブラーニング化するツールとして活用されています。ま た、「インターンシップ」フログラムの運営・実施については、産 業界の意見を取り入れて改善を加えてきており、特に平成 26 年度 は他大学の内容なども参考に大幅な高度化を図りました。	
実務学科	産学連携ゼミナールによる 考察力・発信力・チームワー クカの養成強化	ビジネス実務学科の必修授業「ゼミナール I・II」において、産学連携した学生による研究活動を行いました。	ゼミナール活動における学生の自己評価を測ったところ、前に踏み 出す力・考え抜くカ・チームで働く力が中間発表助らら金銭ビジネ ス学会にかがすた何でいるとどがわかりました。また産学連携を経 験したグループの評価がよりよいという無果も出ています。 これらのデータは、日本ビジネス実務学会第32回・33回大会にて 報告しました。	
幼児教	❸ 「育ちプログラム」による学生の人間関係力の向上	保育者を目指す学生の人間関係力の向上を目指し、コミュニケーションセミナーの開催、乳幼児とその親との交流、グループワークを駆使した授業展開などを行いました。	コミュニケーションセミナーを2年間行った結果、その後の学生の 授業態度の違いが見られ、入学後間もない時期に行う方が意識保持 に有効であることがうかが表ました。また、現効児をもの襲形とり 関わり体験は、"銀"への好イメージ化と保育者としての責任感の高 まりをもたらす傾向が見られました。	
育学科	② 地域との連携協力による フォローアップ講座の充実	学生と卒業生が交流をし、保育者として必要なスキルや 対応力を学び、職業人への道筋を求めた取組をしました。	どの取組も受損態度、理解度は80% を超え、就業への不安度の改善5,50% みられました。また、学生質測定アンケートにもある。 傾地力、状況保難力、理解発見力が、ある程度成長したとあい教 値で答えており、職業人となる原動力になったと考えられます。	
美術	自活の為のビジネス教養と 専門教養の涵養	自分のための制作で終始する傾向にある美術学科学生 に、外部へ向けた視点を持てるようなイベントを企画し、 自己発信していく取組をしました。	他学科の教員の協力を得て行ったコミュニケーションセミナーは、 戸窓いを見せる学生もいましたか必要性を感じたと記述がありま した。平成15年度から始かた東京アート解信は参加する学生が 年々増加し、参加学生の中から学際際におけるアートショップや ライブペインティングの企画が提出されました。自発的な取組が 学科全体の制作意欲向上に繋かっています。	
科	(f) 産業界からの養成に対する 提案取組	産業界からの要請をもとに、美術学科学生から積極的にデザイン・企画など総合提案を行うことで、企画力・提案力・プランティング能力・プレゼンテーション能力の強化を図りました。	平成24年度は、レジャー施設の「加賀フルーツランド」の魅力発信についてデザイン提案を行いました。平成25年度は「社会福祉法人つばむの会」の総合的なデザイン提案を行いました。平成26年度は、地元の加賀の千代女をデーマに「全城アートショップ」を美術学科2年生全員で市内で開店します。グループで討論して、学生の自主的な活動で実践する「自活のチカラ」が身につきました。	













フォローアップ講座
 金城アートショップへ 向けた缶バッチ制作

Ⅲ 教育改善・充実を支える人的体制整備

	部会テーマ	取組内容	成果
	教職員のファシリテーション・スキルの養成	アクティブ・ラーニング手法の導入にあたり、教員自身がファシ リテーション・スキルを習得する研修を平成 24 年度後半から8回 シリーズで組み入れました。	主体的学修を促す授業運営に本学では教員自身がファシリテーション・ スキルを習得する研修を組み入れた結果、グループワークのマンネリ 化にならない工夫をするようになりました。また、複数の教員で協働 して授業を組み立てたり、学科を超えて機識授業を体験する研修を実 施できるようになりました。
全学共通	・	地元産業界の支援により、「研修等参加型」「現場体験型」の両方を 教覧員が体験することで、社会が必要とする人材資質の理解を深め、 産業界のニーズを把握し、教育改革力の向上を図りました。	産業界の研修会へ教職員の参加は定着しつつあります。また学科の特性によって、ビジネス実務学科は医療や金融関係、集術学科は印刷会社や和菓子店、幼児教育学科は幼稚園など、学生の希望する職会と実際に体験することにより、現場のニーズを具体的に理解する機会となりました。その報告を共有しながら、今後とも就職の指導に生かすよう取組んでいきます。
	「親学通信」「保護者サロン」 の活用による保護者の教育 カ向上への支援	保護者への意識啓発を目的として、キャリア親学通信の発行とイ ターネットを利用した保護者サロンによる情報提供を行っています。	保護者から、キャリア親学通信の内容を参考にしているという声が届 いたり、保護者サロンへ個別相談があるなど、多数ではありませんが コミュニケーションツールとして利用されています。保護者サロンへ のアクセス数も年々増加傾向にあります。



7ファシリテーションスキル養成講座







保護者サロンホームページと親学通信

皿. 各部会の概要

1. 学生への教育改善・充実(学科別の取組)

【ビジネス実務学科】

(1)アクティブラーニングの導入による汎用能力と専門能力の養成強化

「ビジネス・アクティブラーニング」部会 部会長 藤元 宏一

事業内容

平成 23 年度から開始した「科目履修プラン」においてアクティブラーニングの基礎を固めた。 次段階として、他の連携大学との情報交流を得て、この手法を全面的に導入する。また、コンピテンシー評価システムを本格的に構築し、その活用も取り入れて、基礎的汎用的能力とビジネス分野の専門能力の養成を充実させ、学生の主体的な学習による意識向上と学修の質向上を図る。

平成 26 年度取組実績

①アクティブラーニング

a) キャリアデザイン系科目のアクティブラーニング授業内容の検討

平成 22 年度から新規開講したキャリアデザイン科目(1 年次前期:キャリアデザイン演習 I、1年次後期:キャリアデザイン演習 II、2年次前期:キャリアデザイン演習 III)は、職種選択に直結した専門プラン選択及び就業意識形成のサポートと、就職活動スキルの修得、卒業後のライフプランも見据えたキャリアデザイン力養成を目的として実施している。その中に、グループワークを中心としたアクティブラーニング演習科目を取り入れることで、一定の成果をあげることができた。

平成26年度は、次のようにアクティブラーニング化を図った。

・演習Ⅲ:「グループディスカッションの方法学習」

就職試験で比較的多く採用されてきている「グループディスカッション」について、グループプロセスを互いに観察するプログラムを実施し、観察した内容をグループでふりかえりながらフィードバックした。その後に、グループディスカッションに関するビデオを鑑賞し、「グループディスカッション」対策スキルを学んだ。

・演習Ⅲ:「ニュースメイキング」

2年前期の最後に社会人基礎力修得を目的として取り組む「ニュースメイキング」グループワークについては、昨年度から授業運営や環境整備を改善して実施したが、グループ、又は個人ごとに取り組む積極度に大きな差異が見られた。今後も改善が必要である。

b) クリッカー利用の推進

クリッカーとは、授業に参加した学生に配付する携帯端末でパワーポイント等を利用して学生の反応を即時に把握できるツールである。平成26年度は、8月22日(金)にソフト上アのイ

ンストールからクリッカー活用のためのパワーポイントデータ作成までを体験できる講習会 を行った。

c)ルーブリック講習会の開催

平成27年2月16日(月)「ルーブリック作成の実践 ~シラバス再設計と共通ルーブリックに向けて~」と題して、産業界ニーズGP事業「ルーブリック研修会」行った。講師は、金沢大学 大学教育開発・支援センター 杉森公一准教授で、金城大学教員2人を含め22人の教員が参加した。

内容は、まず「ルーブリックの意義、アクティブラーニングと教育評価」として講義を受け、 ルーブリックについて内容の復習と再確認をした。その後、現在各教員が実施している授業一

つを取り上げ、シラバスの内容を振り返りなが ら、授業全体のルーブリック作成に取り組んだ。

昼食休憩を挟み、午後は学部・学科の所属別に 作成したルーブリックを一人 5 分で紹介するこ とで、講師と受講者から質問やアドバイスを受 けながらスキルを学んだ。学部・学科別の授業内 容や学生に期待するもの、ルーブリック活用に 対する工夫などを互いに知ることで、様々な知 見を得ることができたと考えている。



②インターンシップ

a) 平成 26 年度実績

今年度も前年度同様な運営方法で、次のように実施してきている。

平成26年度インターンシップ実績

○夏期インターンシップ (実施期間:8月~9月)

受入れ先	実施人数
金沢信用金庫	1人
株式会社宗重商店	1人
野々市市役所	2人
能登印刷株式会社	1人
株式会社エイム	2人
アトム運輸株式会社	1人
EIZO株式会社	1人
株式会社あさがおテレビ	1人
株式会社ヴィテンののいち	1人
ANAクラウンプラザ ホテル金沢	4人
金沢エクセルホテル東急	1人
株式会社マグリット ディスティーノ	1人
アイ・ケイ・ケイ株式会社 キャナルサイド・ララシャンス	1人
医療法人社団浅ノ川 金沢脳神経外科病院	3人
医療法人社団和楽仁 芳珠記念病院	1人
社会福祉法人恩賜財団済生会 石川県済生会金沢病院	1人
河北中央病院	1人
合 計	24人

○春期インターンシップ (実施期間:2月下旬~3月)

○春期インターンシップ (実施期間:2月下旬~3月))
受入れ先	実施人数
小松精練㈱	1人
白山商工会議所	1人
松村物産㈱	2人
株式会社宗重商店	2人
株式会社木村経営ブレーン	1人
株式会社トーケン	1人
株式会社北陸サンライズ	2人
㈱あさがおテレビ	2人
EIZO(株)	1人
白山市役所	2人
野々市市役所	2人
株式会社ヴィテンののいち	1人
株式会社エイム	1人
株式会社ホテル・アローレ	2人
ANAクラウンプラザ ホテル金沢	3人
栗津温泉法師	1人
株式会社マグリット ディスティーノ	3人
株式会社K.Hラヴィール	2人
株式会社ことぶき	1人
近畿日本ツーリスト株式会社 金沢支店	2人
トップッアー株式会社 金沢支店	2人
ツリストクラブ石川	1人
医療法人社団浅ノ川 金沢脳神経外科病院	4人
医療法人社団和楽仁 芳珠記念病院	2人
社会福祉法人恩賜財団済生会 石川県済生会金沢病院	2人
金沢市立病院	1人
小松市民病院	1人
河北中央病院	1人
穴水総合病院	1人
能登総合病院	3人
合 計	51人

平成26年度は、延べ78人の学生がインターンシップを行い、ビジネス実務学科学生の70%近くまで参加者数が大幅に増加した。これまでのインターンシップ運営体制の改善、クラス担任の働きかけなどの相乗効果が表れたと思われる。

b) インターンシップ運営体制の改善について

今年度は、次にあげるような運営体制の改善を実施したが、これが参加者増加に大きくつな がったと考えている。

i)関係書類の追加

・「企業情報シート」、「医療関係情報シート」、「インターンシップ・エントリーシート」、「インターンシップ参加目標及び自己成長評価」を新たに追加した。

ii) 今年度の変更点

1) 全体

- ・全体のフォームを金沢工業大学などの冊子を参考に全面改定した。
- ・事前学習の実施に合わせ配付していた資料を1冊の簡易版(ホッチキス止め)にまとめた。ただし、提出物のフォーマットについてはそれぞれとし、クリアファイルにまとめて配付した。今後は、冊子化を目指し検討する予定である。
- ・今までの自由記載身上書を今後の就職活動に必要な履歴書作成に近づけるため、「インターンシップ・エントリーシート」を作成し、履歴書の自己 PR、志望理由記載につながるようにした。今年度より1年生は、日本語表現の授業の中で800字程度の文章を書かせているので、学生はわりとスムーズにこなしていたようである。
- ・実習報告書は昨年まで紙ベースで提出させていたが、報告書の項目をすべて加味しデータでの報告のみに変更した。今後はデータベースで保管管理していく。

2) 事前研修

- ・インターンシップ受け入れ側より「受け入れ先のことについて、もっと調べてからインターンシップに参加してほしい」との要望が多いため、「企業情報シート」「医療関係情報シート」を用いて、事前面談までに必ず対象企業等を詳細に事前調査することとした。
- 3)インターンシップ中の目標設定及び自己評価
 - ・昨年までは、記述式で学生自身の目標を書いていたが、インターンシップ後に目標達成 を確認できるように項目立てを行い、学生が事前事後に自己評価できるシートに改善し た。

4)報告会

- ・昨年までは、ロの字形式で学生各自が 2~3 分の発表報告を行っていたが、今年度から はプレゼンテーション形式で一人 5 分間の発表をすることにした。
- ・学生には、5分の発表は原稿にすると約1,600字程度であることを伝えていたが、字数 を埋めるために受け入れ先基本情報を入れ込んだものになり、本来のインターンシップ の報告部分が最小限になってしまった学生が多く見られた。次回は気をつけていきたい。
- ・これまでの学生に比べ、プレゼンテーション形式の発表はスムーズにこなしていたと思 われる。

5)ルーブリックの作成及び活用

- ・成績評価の可視化と学生への意識づけとして、ルーブリックを今年度から取り入れた。
- ・学生は、教員との面談により教員との評価のギャップを縮めた上で、自己評価する。
- ・項目は経済産業省が明示している 12 の社会人基礎力をベースにして作成した。項目の中には「発信力」など項目に適さないものもあるが、それについては、どのように評価していくのかを今後の課題として検討していく予定である。
- ・今回のルーブリックは基礎ベースとして活用していく。段階を踏むことで、ルーブリック評価も上がって行くので、今後は上級ベースも作成していくことを視野に入れている。

③新入生(平成27年度)への対応

a) 入学前セミナー 平成 27 年 1 月 25 日(日) 13:00~16:00 実施

平成27年度入試において、推薦・A0入試に合格した入学予定者を対象に、入学前セミナーを実施した。

内容は、

- i) 学科長挨拶、入学までの心構えについて
- ii) 先輩によるプレゼンテーション(入学後の取組を紹介)
- iii) 基礎力診断テスト (日本語・英語)

今回新たに、日本ビジネス実務学会「学生プレゼンテーションコンテスト」に出場した先輩のプレゼンテーションを行った。「もっと自分を好きになる〜ビジネス実務学科に入学して〜」(村上さん)、「前に踏み出す力」(小竹さん)というタイトルで、日頃の授業やインターンシップから学んだこと、心に残った先生からの言葉や同じ目標をもった仲間との出会いなど、ビジネス実務学科に入学してからの様々な体験を発表した。来年度入学予定の高校生は、目標となる先輩の話に親しみを感じながら耳を傾けていたようである。

基礎力診断テストの結果は、後日各生徒に郵送・配付しているが、当日配付したテキストを利用して基礎学力の弱点を入学までに克服できるようにもしている。なお、昨年度から、入学後に再度実施する基礎力診断テストの結果も考慮し、成績不振者には入学後の補習講座受講を課しているが、学生全体の基礎学力向上につながったと考えている。今年度も継続して実施する。

b) 入学直前セミナー 平成 27 年 3 月 20 日(金)9:00~16:00 実施予定

平成 27 年度入学予定者全員が参加して、学内の雰囲気に慣れることと友達ネットワーク作りを目的として、入学直前セミナーを 3/20(金)に実施予定である。今回は来年度から新たに採り入れた「カフェテリア履修」方式の説明と演習も行う予定である。

目的と実施スケジュールは、次のとおりである。

- i)目的
- ・グループワークを通して入学後の仲間づくり
- ・金城短大の雰囲気や施設に慣れる
- ・「カフェテリア履修」について理解する
- ii) スケジュール
- 8:30 受付
- 9:00 学科長挨拶、ガイダンス
- 9:20 演習1:自己分析(自分自身の属性プロパティを確認)
- 10:40 演習 2:総当たりインタビュー(友人関係作り)
- 11:50 昼食休憩
- 13:00 演習 3:「カフェテリア履修」方式の説明と演習
- 15:00 まとめ
- 16:00 終了

④ビジネス・アクティブラーニング部会議

- a) 平成 26 年度「ビジネス・アクティブラーニング」部会について
 - ○開催日時 平成 26 年 10 月 6 日 (月) 16:00~17:30

○議題

- ・平成26年度インターンシップ運営体制の改善について
- ・3年間の総括と今後について
- その他
- 3年間の総括について話し合う中で、次のようなコメントを産業界委員からいただいた。今後の運営改善に活用していきたい
- ○産業界委員からのコメント
 - ・ここまで3年間、我々企業側の意見を採り入れながら、インターンシップの運営方法が大きく改善してきていることを高く評価している。
 - ・就職状況が改善してきたこともあり、インターンシップの目的が今までの職業体験から人 材確保に変化してきているように思われる。
 - ・インターンシップの目的に合わせて、内容を見直してはどうか。例えば、受け入れ先企業へ就職希望する学生は、インターンシップ期間の2週間で現場体験・実務を教え込むなどの内容にする。また、進路を模索中の学生については、1週間の企業体験に留めるなど、目的に応じた受け入れ期間や内容を設定してはどうか。
 - ・平成26年度から導入されているルーブリックは、繰り返し活用していくことで大きな効果が期待できる。
 - ・学生への方向付け、フィードバック不足について検討してほしい。

- ・インターンシップで自己の力を発揮できるようになってほしい。
- b) 「ビジネス・アクティブラーニング」部会 学内運営打ち合わせ
 - ①5/26(月)15:00~、②7/8(火)13:30~、③8/22(金)9:00~、④10/6(月)15:00~、
 - ⑤H27/1/16(金)16:00~

打ち合わせ内容は次のとおりとする。

- ・インターンシップの運営、高度化の検討
- ・入学前セミナー、入学直前セミナーの内容・運営の検討

平成 24 年度~26 年度取組総括と今後

① アクティブラーニング

a)キャリアデザイン系科目におけるアクティブラーニング授業内容の検討

初年次教育とキャリア教育を兼ねたキャリアデザイン演習 I・Ⅱ・Ⅲにおいて、授業のアクティブラーニング化を中心にクラス担任教員と検討を行い、内容を改善、実施してきた。更に、新入生に対するプログラム「入学前セミナー」、「入学直前セミナー」、「新入生合宿研修」の内容を相互に連携させることで、より教育効果が上がるように運営した。具体的には、次のような内容に取り組んだ。

- ・チームワークやコンセンサストレーニングを目的としたグループワークを導入した。
- ・産業界と連携した企業人講話として「職業理解」、「人事担当者のアドバイス」に加え、「企業で活躍できる人材」として企業の管理職と部下の方を招聘し、日頃の仕事に対する習慣や心構えなどについて講話いただいた。
- ・就職活動前に企業情報収集スキルを修得する「企業研究」をグループワークで行い、各自の 調査内容を学生間で共有できるようにした。
- ・就職試験に多く採用されている「グループディスカッション」について、グループプロセス を互いに観察し、その内容をグループでふりかえりながらフィードバックするプログラムを 実践した。
- ・最終的に「社会人基礎力」の修得度を高めるために、グループでニュース番組を作成する「ニュースメイキング」を実施してきたが、今後も内容や運営方法を検討・改善していく必要がある。
- b) クリッカー活用の推進

授業をアクティブラーニング化するツールとして、学生の反応を瞬時に集計、表示できるクリッカー活用について利用講習会を毎年行ってきた。

c)ルーブリック講習会の実施

平成27年2月16日(月)に「ルーブリック作成の実践」講習会を開催した。

② インターンシップ

夏期(8月~9月)・春期(2月下旬~3月)休暇期間にインターンシップを行い、平成26年度は70%程度の学生が参加し、「社会人基礎力」の修得やその経験を就職活動に生かしている。運営方

法については、ビジネス・アクティブラーニング部会における産業界メンバーの意見や、産業界ニーズ GP 参加大学の先進的事例を取り入れ、検討・改善を行ってきた。具体的には次のような内容に取り組んできた。

a) 事前面談の導入

インターンシップ実施前に受け入れ側企業・事業所を訪問して、インターンシップ実施の目的と内容の打ち合わせを行うことで、受け入れ側と学生のミスマッチを減少させることができたと考えている。

b) 富山県、福井県のインターンシッププログラムの活用

富山県、福井県では経営者協会等を中心に充実したインターンシッププログラムが整備されている。両県出身の学生に対しては、インターンシップ参加支援スケジュールを作成、実施してきた。

c) 医療事務実習先の開拓

進路先として医療事務を希望する学生が多くなってきており、それに対応して医療事務のインターンシップ受け入れ先の確保も重要な課題である。現在までに、北陸三県で30人程度の受け入れ先を得たと考えているが、今後も学生の志望動向を把握しながら受け入れ先の拡大に努める。

d) 運営改善

配付書類の冊子化、実習報告書のデータ化、報告会形式の変更、ルーブリックの作成及び活用などを行ってきた。

e) 関係書類の修正及び追加

「企業情報シート」、「医療関係情報シート」、「インターンシップ・エントリーシート」、「インターンシップ参加目標及び自己成長評価」を導入した。

③ 今後の課題

a) インターンシップ受け入れ先の確保と新運営体制の確立

インターンシップ推進は政府の方針でもあり、今後も多くの学生が参加するように支援していく考えである。平成27年度は、産業界ニーズGPにおけるテーマBの取組で、富山県や福井県と同様に石川県でも本格的なインターンシップ運営が開始される予定となっている。この流れを適切に捉えながら、かつ、従来本学独自で行ってきた受け入れ先とも良好にコミュニケーションを図ることで、新しい運営体制を早期に確立していく。

b) 授業のアクティブラーニング化推進

アクティブラーニングは、今後多様な方式やツールが開発され続けていくと考えられる。 常に動向を把握しながら、学生の社会人基礎力修得に役立つプログラムの実施推進を図っ ていきたい。

(2) 産学連携ゼミナールによる考察力・発信力・チームワークカの養成強化

「産学連携ゼミナール」部会 部会長 矢澤 建明

事業内容

平成22年度より始まった「金城ビジネス学会」での発表を目標として、考察力・発信力の養成を試行してきたが、これをさらに発展させ、2年次1年間にわたる必修ゼミナールにおいて、地域・産業界でのフィールドワークなども多く取り入れ、考察力や発信力だけでなく、異質の人々とのチームワーク力という社会人基礎力の養成も強化する。

平成 26 年度取組実績

授業科目としてのゼミナールは、前期「ゼミナール I」、後期「ゼミナール I」とし、ビジネス 実務学科において必修単位(全員が履修)として開講している科目である。担当教員は、ビジネス実務学科全専任教員で、各教員 1 名あたり学生が 5 人~10 人 "配属" され、4 年制大学さなが

らのゼミ研究活動をする。下記のとおり、前期末に中間発表(5分科会に分かれての発表)・2月中旬に「金城ビジネス学会」で発表というスケジュールである。

・4月~7月 ゼミナール活動

(各ゼミ単位で産学連携)

· 8 月 1 日(金) 中間発表会

2年生全員が発表(5分科会)

産業界からコメンテータを招く。

・10月~1月 ゼミナール活動

(各ゼミ単位で産学連携)

- ・12月に広報用チラシ配布(図1)
- · 発表概要集発行
- ・2月12日(木) 産学連携ゼミナール研究発表会

「金城ビジネス学会」第5回年次大会

[図1]

平成 26 年度は、産業界ニーズ GP の体制となって 3 年目、最終年度であることから、産学連携を更に推進するという目標で開始した。本節の最後に、平成 26 年 8 月 1 日に実施した「産学連携ゼミナール」中間発表会の報告書、平成 27 年 2 月 12 日に実施した「金城ビジネス学会」第 5 回年次大会(産学連携ゼミナール発表会)の発表プログラムを添付した。また、別冊の発表概要集も参照していただきたい。

〇中間発表会(図2)

日時:平成26年8月1日(金)14:30~16:30

本年度の中間発表会では、5つの分科会で29件の発表があった。また、産業界からコメンテータとして11人を招くことができ、すべての分科会にコメンテータが参加することとなった。詳細については、「産学連携ゼミナール」中間発表会の報告書を参照していただきたい。







[図2]

〇「金城ビジネス学会」第5回年次大会(産学連携ゼミナール発表会)

日時: 平成27年2月12日(木)9:00~16:30

学生数減のため、昨年度より少ない30件の発表となった。また、産業界からは8人の方を招くことができたが、年度末の多忙な時期のせいかこちらも昨年度より少ない数となった。しかし、マスコミは新聞2社、テレビ局1社の取材を受け、昨年度よりも注目を集めたといえる。一方、発表を客観的に評価できないか、という部会での意見及び評価方法としてルーブリックを活用してはどうかという提案があり、今回はじめて「ルーブリックによる発表評価」を取り入れた。

「金城ビジネス学会」発表ルーブリック(評価基準)

		すばらしい(5)	よい(4)	あと少し(3)	がんばろう(2)	不合格(0)
	発表内容・構成	問題設定が明確であり、豊	問題設定が少しあいまいで	内容は豊富であるが、問題	内容としての分量はあるも	内容・構成とも金城ビジネ
		富な内容をきわめて論理的	あるが、内容が豊富で論理	設定があいまいで、構成が	のの、問題設定がなく、まと	ス学会として不十分なまま
発		に構成して発表している。	的に構成された発表をして	体系立てられていないまま	まりのない発表をしてい	発表している。(あまりに発
表			いる。	発表している。	る。	表時間が短い。)
内内	スライド、図表・	プレゼン内容を補強するた	文章は多いものの、内容を	図表・画像・映像をたまに	図表・画像・映像をまったく	スライド、図表・画像・映像
容	画像・映像など	めの図表・画像・映像など	支持する図表・画像・映像	使っているが、プレゼン内	使わず、文章のみのスライ	などの準備ができていな
1"		を効果的に使い、文章を多	などを使っている。	容を支持しておらず、文章	ドをつくっている。	い。
		用せず、インパクトがあるス		中心のスライドをつくってい		
		ライドを作成している。		る。		
	発表姿勢	聴衆とアイコンタクトを保	聴衆とのアイコンタクト、十	聴衆とのアイコンタクト、十	聴衆とのアイコンタクトがと	メモを見ながら発表してい
		ち、大きな声でボディラン	分な声量、ボディランゲー	分な声量、ボディランゲー	れず、声が小さく、ボディラ	る。
発		ゲージがあり、スライドをほ	ジ、スライドを見ずに発表の	ジ、スライドを見ずに発表の	ンゲージもなく、ずっとスライ	
表		とんど見ずに発表している。	うち、2つができている。	うち、1つができている。	ドを見たまま発表している。	
者	内容理解·質問	プレゼン内容を十分に理解	プレゼン内容を理解して発	プレゼン内容をよく理解せ	プレゼン内容の知識に乏し	プレゼン内容を理解しない
-	応対	して発表している。また、質	表している。質問に対して	ずに発表している。初歩的	いまま発表している。内容	まま、発表している。質問さ
		問に的確に応え、かつ詳し	つまることもあるが、何とか	な質問には応えられる。	に関する質問にうまく応えら	れても無言のままである。
		く説明できる。	説明できる。		れない。	
聴	他の学生の発	他の学生の発表を真剣に	質問はできなかったが、他	質問することもなく、他の学	他の学生の発表中に、うっ	他の学生の発表がはじまっ
講	表を聴く者とし	聴き、関心のある発表で積	の学生の発表を真剣に聴	生の発表をよく聴いていな	かり居眠りをしている。	ているにも関わらず、会場
者	て	極的に質問している。	いている。	ر١.		を抜け出して自分達の発表
						練習をしている。

[図3]

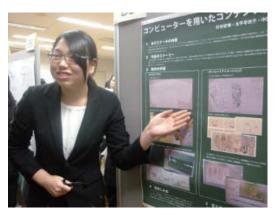
ゼミナール II 評価基準(参考) 出席および活動状況50%、発表概要及び発表会を50%で考慮し、ゼミナール担当教員全員で、評価する。

上記、ルーブリック(図3)を、金城ビジネス学会1か月前に学生に周知し、当日も専任教員が 分担で評価にあたることで、例年になく緊張感のある発表会となった。発表当日は、スライドを ずっと見たままの発表も少なく、聴衆に向かって話す発表が多かった。結果として、不合格とな る発表はなく、ルーブリック活用によって成績を大きく変更するものはなかったが、よりよい発 表会となったことは間違いない。(図4)









[図4]

平成 24 年度~26 年度取組総括と今後

全学科でのゼミナール活動・金城ビジネス学会としての発表会は、平成22年度から始まり、就業力GP時代から数えると約5年の活動となる。以下にその概要をまとめる。

• 平成 22 年度

ビジネス実務学科情報マネジメントコース全員が必修科目として半年間 2 コマのゼミナールを実施、ホテル&観光ビジネスコース、キャリアデザインコース、ビジネス実務コースの学生は選択科目で半年間 1 コマのゼミナールを実施。平成 23 年 2 月 7 日に上記学生のゼミナール公開研究発表会「金城ビジネス学会第 1 回年次大会」を実施。金城ビジネス学会では 50 人の学生が登壇し、発表を行った。

· 平成 23 年度

前年同様の形式でゼミナール活動を行った。ビジネス実務コースの学生も必修科目となり、平成23年2月6日にホテル&観光ビジネスコース・情報マネジメントコース・ビジネス実務コース合わせて88人による金城ビジネス学会第2回年次大会を開催した。

· 平成 24 年度

コース編成が変さらになり、ホテル&観光ビジネスコースの学生は選択科目、ビジネスキャリア

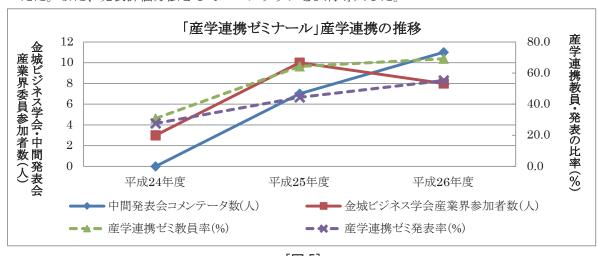
コースの学生は必修科目となった。ホテル&観光ビジネスコースの選択者は3人だったが、全ビジネスキャリアコース学生92人、合計95人によるゼミナール活動を週1コマ・1年間の予定で4月から開始した。10月に文部科学省による「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」採択を受け、公に産業界と連携した研究活動を行うことができ、平成25年2月5日に金城ビジネス学会第3回年次大会「産業界連携ゼミナール発表会」を開催した。産業界から4人の出席をいただいた。

· 平成 25 年度

産業界ニーズ GP の 2 年目ということで、さらに産学連携が推し進められた。ビジネス実務学科全学生が「ゼミナール I・II」必修科目となり合計 133 人がゼミナール活動を行った。8 月 2 日には「産学連携ゼミナール中間発表会」を分科会形式で実施し、7 人の産業界委員にコメンテータとして出席いただいた。また、平成 26 年 2 月 13 日には、金城ビジネス学会第 4 回年次大会「産業界連携ゼミナール発表会」を開催し、36 件の発表中 16 件の発表が産学連携しているというものであった。さらに、産業界委員から 10 人の参観をいただき、過去最大規模の学会となった。

• 平成 26 年度

産業界ニーズ GP の最終年として、専任教員・産業界委員ともに産学連携を強く推し進めるよう要請した結果、8月1日の「産学連携ゼミナール中間発表会」に11人の産業界委員をコメンテータとして招くことができた。平成27年2月12日には、金城ビジネス学会第5回年次大会「産業界連携ゼミナール発表会」を開催し、30件の発表中16件の発表が産学連携となり、全体の半数を超えた。また、発表評価方法としてルーブリックを試行導入した。



[図5]

図 5 は、3 年間にわたる産学連携の推移である。産業界委員の参加は年を追って増えているが、 最終年の金城ビジネス学会のみ少し減少した。しかし、最終年度の中間発表では 11 人のコメンテ ータを招き、5 つの分科会すべてに参加いただいた。例年、中間発表では少人数での発表会のため 緊張感に欠ける学生もいたが、平成 26 年度はどの分科会も引き締まったものとなった。

また、産学連携ゼミテーマを設定した教員の比率(産学連携ゼミ教員率)、及び産学連携ゼミテ

ーマを発表した件数の比率(産学連携ゼミ発表率)は、年を追うごとに 伸びてきている。一方、この取組の成果を測るために、中間発表終了時、 及び金城ビジネス学会終了時に、発表した学生に対してアンケートを

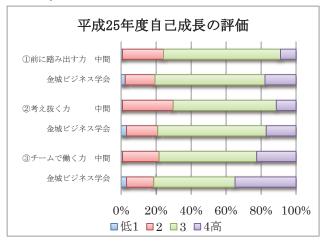
「自己成長の評価」

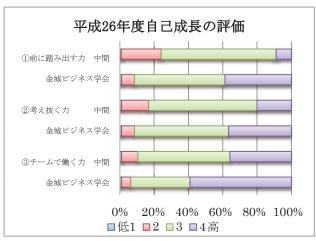
- ①前に踏み出す力
- ②考え抜く力
- ③チームで働く力

行い、「自己成長の評価」として次の3項目について質問した。

なお、以降のデータにおいて、平成24年度中間発表時は、本取組がスタートしていなかったため アンケートを取得していない。また、平成24年度金城ビジネス学会では5段階で評価してもらっ たが、比較のため平均をとって4段階評価となっている。

まず、平成25年度・平成26年度での中間発表後の自己評価と金城ビジネス学会後の自己評価を比較したものが図6である。中間発表後に対して金城ビジネス学会後の自己評価が高くなってきている。





[図6]

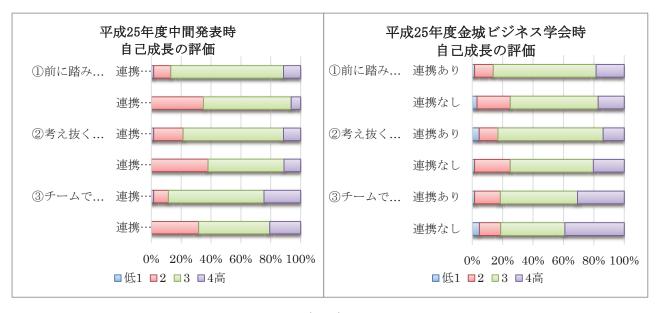
また、平成24年度から平成26年度にかけて、 学生の自己評価を並べてみたものが図7である。 こちらは、異なる年度の学生の結果であるため、 学生の成長度合いという比較ではない。しかし、

- ・産学連携の推進 (教員のテーマ設定、産業界委員の発表会出席)
- ・本取組の学生への浸透
- ・発表評価方法としてのルーブリック導入 といった効果が、異なる年度の学生に影響を与え 年度を経るごとに高い評価となって現れると考え られる。

さらに、産学連携が学生にどのように効果を与えたかも調査してみた。平成25年度は、産学連携を実施したゼミグループとしなかったゼミグループでアンケート項目を比較してみた。(図8)

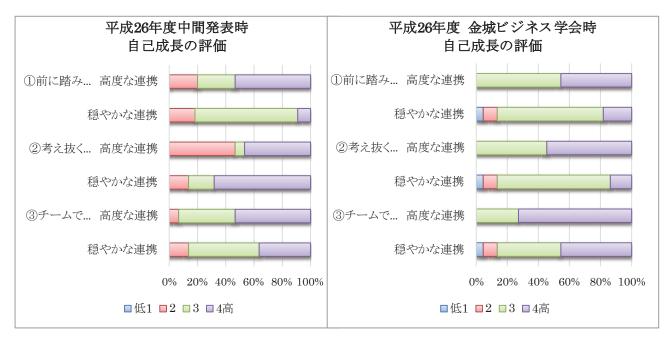


特に、中間発表後のグラフで、3以上(positive)と2以下(negative)を比較すると、産学連携しているグループの方があきらかに高い。ただし、1年経過後の金城ビジネス学会時では、連携のないグループも自己評価が高くなり、差がなくなってきている。



[図8]

平成 25 年度は、産学連携の有無のみで調査したが、平成 26 年度は連携の度合いを考慮にいれて調査した(図 9)。26 年度も中間発表時は連携ありのグループが高くなり、1 年経過後はその差がなくなってくるという傾向は同じであったが、産学連携の度合いを考慮すると、穏やかな連携より高度な連携をしたグループの自己評価が高くなる。統計的な評価は実施していないが、中途半端な産学連携は効果がなく、連携するならしっかりとすべきではないかと考えられる。(注:産学連携の度合いは、企業団体と①一緒に企画・開発 ②一緒に作業 ③事業等を提案 ④インタビュー調査 ⑤見学 の 5 つの項目でアンケート調査をして測った)



[図9]

以上のデータは、日本ビジネス実務学会の第32回全国大会(平成25年6月)及び第33回全国大会(平成26年6月)、中部ブロック研究会(平成27年1月)において報告されている。

〇産学連携ゼミナール部会議

「産学連携ゼミナール」部会としては、各年度に1回ずつの会合を行い、ゼミナールにおける 産業界との連携、及び各発表会の運営について議論を重ねてきた。

- 平成 24 年度(平成 25 年 2 月 19 日)
 - ゼミナール学生取材の受け入れ・中間発表コメンテータ依頼。
- 平成25年度(平成26年3月20日)
 ゼミナールテーマ案の提示・中間発表コメンテータ依頼。
- 平成26年度(平成26年10月21日)
 3年間の総括・評価方法(ルーブリック)の活用 今後のゼミナール連携の依頼。

○今後の課題

反省点としては、部会が予定通り開催できなかったり、産学連携が順調に進まなかったりしたことがあげられる。また、学外からの研究テーマ募集による研究活動も、白山市・白山商工会から頂いたテーマに止まっている。しかし、学生の自己評価データ・産業界委員の発表会への参加者数・産学連携率からは、おおむね成果があったと考えている。

一方、教員側の反省点としては、産学連携を強く要請しながらも 100%に達しなかったことである。しかしながら、産学連携を実施したグループとしなかったグループの比較ができたことは、ポジティブに考えており、この結果をもとに今後も専任教員に強く要請していきたい。更に、産学連携をする教員数・体験した学生数とも毎年増えつつあり、今後は全学生が何らかの産学連携をした研究をする体験ができるようにしていきたい。

産業界ニーズ GP としての事業は、平成 26 年度をもって終了となるが、授業としての「ゼミナール I」(前期)、「ゼミナール II」(後期) は今まで通り実施していく予定であり、中間発表会ならびに金城ビジネス学会も規模の縮小は考えていない。また、産業界委員の方々と面識が持てたことをきっかけとして、今後とも学生取材の受け入れ、テーマ募集、中間発表会・金城ビジネス学会への出席をお願いしつづけたい。

参考: 平成 26 年度「産学連携ゼミナール中間発表会 報告集」

平成 26 年度

「産学連携ゼミナール」中間発表会 第1分科会 報告書

日時: 平成26年8月1日(金)14:30~16:30

会場: A105 教室

概略: 岡野ゼミ・井戸ゼミ・下口ゼミの学生による中間発表会を行った。コメンテータとして、ユニー株式会社業務本部人事教育部チーフマネージャーの八田智之様と今村証券株式会社総務課課長の川畑柱一様にお越しいただいた。

発表概要及び質問等は、以下のとおりである。

1. タイトル:身近なクレーム事例の分析報告

(1)発表者: 3名 王 坤・坂井佑衣・門馬由佳

(2)概 要: ①クレームとクレマーについての基礎知識とゼミでの定義付けをした。 ②メンバーが持ち寄った身近な事例中3件を取り上げて概略を説明した。 ③身近な事例11件に共通して言えるポイントについてまとめた。

(3)質問等: ①「クレームは宝の山」とあったが、宝の部分の紹介があれば良かったのではないか。

2. タイトル:クレーム対応の実地調査報告

(1)発表者: 2名 高平祐太・安田依織

(2)概 要: ①アピタ金沢店に5名全員が訪問し実地調査をしたことを報告した。 ②アピタ金沢店を経営するユニー株式会社のクレーム対応を報告した。

③実地調査で学んだことに併せ、ゼミメンバーで考えた対応を提案した。

(3)質問等: ①クレーム (エスカレーターの事例) に、実際はどう対応したのか。

3. タイトル:金短マップの改良

(1)発表者: 5名 川本真衣・中田茉奈美・永原茉実・橋田佳那子・横山結菜

(2)概 要: ①金短マップの改良点について報告した。

②前期の主な改良点は食堂メニューの改良と、写真のリニューアルである。

③福井大学への取材についても報告した。 (3)質問等: ①すでに利用することができるか。

②一番難しかったところはどこか。

4. タイトル:電子掲示板の活用

(1)発表者: 4名 北本颯希・瀬戸由佳梨・豊蔵玲緒菜・鼠田祥子

(2)概 要: ①就職進学支援室前の電子掲示板の改良について報告した。

②WindowsXPからWindows7へのアップグレードについて報告した。

③電子掲示板へのメニュー追加について報告した。

(3)質問等: ①どのように学生の意見を聞く予定か。

②就太くん、就蔵くん、EISの説明は、最初の方に説明があった方が分りやすかったのではないか。

5. タイトル:外国人旅行者調査

(1)発表者: 5名 奥村麻椰・北崎百莉・小林智香・橋野日菜子・吉田恵

(2)概 要: ①石川県を訪れている外国人旅行者に行ったインタビュー結果を報告した。

②質問は、期間旅行、食べた物、日本の印象、など計 9 項目であった。

③調査を通じ、学生が発見したことや意外だったことを報告した。

(3)質問等: ①どうやって観光地を巡ったか。(交通手段)

②英語でコミュニケーションをとってみてどうだったか。

③外国人旅行者と話をしていて、自分達が行ってみたい国はあったか。

6. タイトル:英語で金沢案内

(1)発表者: 4名 石坂美優・乾川麻美・小浦真梨子・篠塚遥香

(2)概 要: ①外国人旅行者を専門にガイドしている金沢グッドウィルガイドネットワーク (KGGN) を訪問し、担当者にインタビューを行った結果を報告した。

②外国人旅行者から人気がある観光地を訪れた結果を報告した。

(3)質問等: ①どうやってインタビューする相手を探したか。 ②ボランティアガイドには何人登録しているか。

講評1 (ユニー株式会社 八田様)

各発表に対して一言ずつコメントをいただいた。また、全体として、幅広い内容の発表が多かったが、事例が多いと浅いままで終わる傾向があるので、より深く掘り下げた発表を期待するとのコメントをいただいた。

講評2 (今村証券株式会社 川畑様)

発表全体を通して、幅広い内容を盛り込み過ぎているため、発表に深みが欠ける。ポイントを絞る必要がある。また、発表に至るまでの段取りが重要なので、きちんと準備して発表に臨むようコメントをいただいた。

「産学連携ゼミナール」中間発表会 第2分科会 報告書

日時:平成26年8月1日(金)14:30~16:30

会場: A106 教室

概略:加藤ゼミ・藤元ゼミの学生による中間発表会を行った。コメンテータとして、金沢信用金庫 樫野紀之常務取締役、能登印刷㈱ 藤多睦 巳常務取締役にお越しいただいた。発表概要及び質問等は、以下のとおりである。

1. タイトル 3D デザイン+3D プリンタによる立体の作成

(1)発表者:4名 石塚眞子、大野祐実、金子実紗、山田さくら

(2)概 要: ①パーソナル 3D プリンタを利用した立体作成方法を紹介した

②パーソナル 3D プリンタの造形方式を紹介した

(3)質問等: ①今後修得していきたいスキルとは何か A.きれいなフィギュアを作成するために必要なスキル

②フィギュアでは何を作るのか A.人間をモデルにして作成したい

③メモを見ないで発表してほしい (コメンテータはメモを見てもいいことを知らなかった様子だった)

④目的は何かよくわからない A.まだデザインの操作を覚えた段階で今後具体的な目的・目標を立てて取り組んでいく

2. タイトル 3D デザインソフト「Autodesk 123D Design」

(1)発表者: 4名 川坂恵美、東友里恵、本多彩絵、山田栞里

(2)概 要: ①3D デザインソフト「Autodesk 123D Design」を紹介した

②利用頻度の高い主なコマンドの使い方についてデモを行い、立体のデザイン方法を紹介した

(3)質問等: ①今後どのような立体を作りたいのか A.複雑な形状の立体を作成していきたい

②その立体を作成するのにどれくらいのスキルが必要か A.これから調べて取り組んでいきたい

③3D プリンタの凄さを伝えるような発表にしてほしい

A.2月の発表会ではいくらか伝えられるものにするよう努力していく

3. タイトル タブレット活用の紹介

(1)発表者:2名 小泉志穂子、清水美帆

(2)概 要: ①パソコンとタブレットの違いを紹介した

②テザリングについて説明した

③女学生にお勧めのアプリとその使い方をデモで紹介した

(3)質問等: ①タブレットの今後の普及はどうか?薄型軽量パソコンも登場している。

A.スマホのテザリングを使うことによってどこでも使えるので、普及は進むと思われる

②どのような場面で使えるのか具体的に示してほしい

A.2 月の発表会では短大生の日頃の生活の中での利用方法を紹介する

4. タイトル 金城キャンパス内の鳥類調査~あっ!あの鳥はなに?~

(1)発表者:5名 岩倉瑞穂、奥澤由加里、田中美咲、明嵐咲樹、安田朱里

(2)概 要: ①目的は金城キャンパスに飛来する鳥類の調査を行い、金城キャンパスの環境について考えることである

②「日本野鳥の会 石川」に教示いただきキャンパス内の2箇所で調査した結果を紹介した

(3)質問等: ①これまでの調査から、何か傾向はつかめたか? A. ムクドリが多い

②季節によって見られる鳥が違うと思うが、そのあたりの調査も進めるのか?

A. 毎週月曜日を調査日として、今年度、できる限り続けていく

③鳥類調査を通して金城キャンパスの環境について考察する、とあるがどの程度まで掘り下げて考察を深めるのか

A. 具体的にはまだ考えていない。今後、検討する

5. タイトル 金城短大生にオススメする恋愛スポット~石川・富山で恋愛成就~

(1)発表者:4名 長船映莉、窪田梨花、渋谷 愛、早水綾香

(2)概 要: ①目的は自分磨きをする遊び場として「恋愛スポット」に焦点を当て、内容や効果などを調べることである

②学生へのアンケート調査や実地調査の結果を報告した

(3)質問等: ①恋愛による自分磨きとあるが、どういう意味か?

A. 恋愛すれば、自分の魅力をより高めたいという意識がはたらく。それが自分磨きにつながると思う

②漢字の読みができていない。風情は「ふぜい」、成就「じょうじゅ」と読むので間違えないように

A. ご指摘に感謝する

6. タイトル 千代女ってどんな人?~その俳句から探る千代女の人となり~

(1)発表者:1名 森 綾美

(2)概 要: ①目的は千代女の人となりを探り、俳句の真意に近づくことである

②文献調査や、千代女の里俳句館などの訪問を行い得た基本的な知識を報告した。

(3)質問等: ①調査研究の目的にしたがって、様々な俳句について、通常の解釈だけでなく、人となりを探る解釈を

考えていってほしい

A. 今後の調査研究の中で進めていきたい

②有名な句の冒頭「朝顔に・・・」を「朝顔や・・・」に変えた理由は?

A. 不勉強なのでわからない。調べておく

「産学連携ゼミナール」中間発表会 第3分科会 報告書

日時:平成26年8月1日(金)14:30~16:30

会場:107教室

概略:廣瀬ゼミ・若月ゼミの学生による中間発表会を行った。コメンテータとして、加藤義裕様(白山商工会議所)、川崎肇様・部谷まどか様(白山商工会)にお越しいただいた。発表概要及び質問等は、以下のとおりである。

1. タイトル コンピュータを用いた映像制作① ~白山市 PR 映像の作成~

(1)発表者: 3名 有馬由里香・宮竹珠里・山口侑稀

(2)概 要: ①白山市について・白山市 PR映像はあまり見てもらえない。

②「バカッコイイ」動画はよく見てもらえる。

③白山市をロケ地として「バカッコイイ」 PR映像を作成予定。

(3)質問等: ①「バカッコイイ」と白山市との関係が不明確である。

②ロケ地の選び方をもっと工夫をしたらよいのではないか。

2. タイトル コンピュータを用いた映像制作②

(1)発表者: 3名 中田茅佳・太平早衣子・杉谷安惟

(2)概 要: ①音声素材を用いたラジオドラマの制作。

②ラジオドラマの歴史・制作動機。

③ラジオドラマ予告編。

(3)質問等: ①効果音にもっと工夫があったらよいのでは。たとえば自作効果音など。

②ラジオドラマを使って白山市と関連づけられることは考えられないか。

3. タイトル 「白山きりまんじゃろ」PR 大作戦

(1)発表者: 5名 鈴木可菜・脇本莉歩・田村莉奈・坂本志帆・川端彩花

(2)概 要: ①4月から白山商工会との共同事業で行ってきた「白山きりまんじゃろ」PR活動の概要について説明。

②PR活動を通じで、うまく行ったところ、うまく行かなかったところを分析し、今後どのような

PR活動を行えばいいかを提案した。

(3)質問等: ①マーケットセグメンテーションはどのようなものを想定していたのか

②今後の展開についてわかっていることがあれば

4. タイトル 白山ろくでキャンドルナイトイベントを企画してみる

(1)発表者: 4名 越多江里香・林郁魅・溝口彩弥・松浦早紀

(2)概 要: ①キャンドルナイトに続くイベント「一里野カップルフォトコンテスト」に至った経緯

②特別撮影会までに準備を通して、イベントを1つ行うことの意義と何を準備しなければいけないかを整理

(3)質問等: ①イベントの規模はどの程度のものにしたいのか

②どのようにすれば若者が集まるのか

5. タイトル 北陸新幹線で北陸観光はどうなる

(1)発表者: 1名 山﨑隆宏

(2)概 要: ①坂井市の北陸新幹線対策

②白山市の北陸新幹線対策

(3)質問等: ①いくらで東京に行けるのか

②話を聞いてきて何が分ったのか

コメンテータより

加藤様:白山市のPRには、若い人の意見が参考になる。今後ともよろしくお願いしたい。

部谷様:白山きりまんじゃろで共同事業を学生としてきたが、みなさん大変によくやってくれた。

他の発表でも努力の様子がうかがえるので、今後ともがんばってほしい。

「産学連携ゼミナール」中間発表会 第4分科会 報告書

日時: 平成 26 年 8 月 1 日 (金) 14:30~16:30

会場: A208 教室

概略:中原ゼミ・井上ゼミ・瀬戸ゼミの学生による中間発表会を行った。コメンテータとして、社会福祉法人恩賜財団石川県済生会金沢病院 事務部参事の林勉様と株式会社石川コンピュータ・センター総務部長の大弥寛司様にお越しいただいた。発表概要及び質問等は、以下の とおりである。

1. 電子カルテシステムを普及させるには

(1)発表者: 4名 荒木のどか・川田唯衣・五間長彩加・堂彩音

(2)概 要: ①背景と目的 ②カルテ (診療録) について

③オーダリングシステムについて ④部門について

⑤電子カルテシステムとは

⑥今後の課題

(3)質問等: ①「電子カルテシステムを普及させるには」の部分をもう少し発表してほしい。

②東日本大震災後、東北を中心に行っている活動も調べるとよい。

③医師の発言を聞き取り、カルテ入力するといった研究も進んでいるので、情報の整理をしてはどうか。

2. 医師事務作業補助者の現状と今後の課題

(1)発表者: 3名 中道唯・布村愛佳・若林ゆり子

(2)概 要: ①背景と目的 ②日本の医療保険制度

③医師事務作業補助体制加算について ④医師事務作業補助者について

⑤今後の課題

(3)質問等: ①医師事務作業補助体制加算導入の成果について、国が行ったアンケート調査があるので、その結果も

参考にしてはどうか。

3. 高度経済成長のあゆみ

(1)発表者: 3名 早崎美里、松井菜摘、堀田沙紀

(2)概 要: ①高度経済成長の要因

②高度経済成長と現在との比較

③まとめ

(3)質問等: ①戦後一貫して日本の貯蓄率が高いのはなぜか。

②利便性追求の社会のあり方についてどう考えるか。

4. トヨタ生産システム

(1)発表者: 2名 井村駿天、吉村沙也香

(2)概 要: ①トヨタ自動車の現状

②トヨタ生産システムの考え方

③成功の要因と問題点

④まとめ

(3)質問等: ①テーマが大きすぎて短時間で論じるには難しいのではないか。

②トヨタ生産方式を金城短大の運営に生かすにはどうすればいいか。

5. VOCALOID に慣れる ~歌詞入力と自然感を出す~

(1)発表者: 4名 稲村茜璃、畠紗貴、山本美奈、四月朔日瑞貴

(2)概 要: ①はじめに

②VOCALOID とは?使用したソフト上アについて

③「虫の声」の楽譜入力

④「おはようございます」の解析

⑤まとめ

(3)質問等: ①「虫の声」の制作期間はどれくらいか。

②ミク、リン、レンの違いは何か。

③今後の研究課題として、どんな方言を研究する予定でいるか。

6. アルファー波の研究 ~どんな時に集中できるか~

(1)発表者: 3名 坂井麻美弥、四十万朋子、宮川綾乃

2)概 要: ①アルファー波とは?

②実験に使用した装置の特長

③実験内容 ア)場所の相違 イ)効果音の相違

④実験結果、考察

⑤まとめ

(3)質問等: ①今後の研究で使用する HMD (^ッドマウントディスス゚レイ) とはどんなものか。

②大勢の実験結果ではないので対象学生を絞ってはどうか。

③脳波の高い人は、いつも高い結果となったのはなぜか。

※最後にコメンテータから一言ずつ

林様:昨年より良かった。後期に向けてもう少し勉強して発表をしてください。

大弥様:パワーポイントが良かった。ただし、リハーサルにかけた時間はどれくらいか? 練習不足を感じるグループがあったので次回の発表で頑張ってほしい。

「産学連携ゼミナール」中間発表会 第5分科会 報告書

目時: 平成26年8月1日(金)14:30~16:30

会場: A135 教室

概略:矢澤ゼミ・大屋ゼミ・能ゼミの学生による中間発表会を行った。コメンテータとして、株式会社エイトコンサルタント代表取締役 八田吉弘様株式会社宮西計算センター 監査三課 課長補佐 西田敬志様 白山市子育て支援課課長 加藤光男様にお越しいただいた。 発表概要及び質問等は、以下のとおりである。

1. twitter を利用した広報活動@金城花子

(1)発表者: 3名 田地 祐美奈、友田 菜々花、橋田 日菜子

(2)概 要: ①ミクシィは減少している。

②のっティのツイッターアカウント取材に野々市市役所訪問。

③金城花子はオープンキャンパスなどでアドレスを配るなどの活動を通して、アクセス数がこれまで 10 人だったのが 今年 74 人に増えた

(3)質問等: ①「のってィ」の twitter 活動の良い点は何ですか?⇒質問等の書き込みに対してほぼ総て返信してくれる。

対応が丁寧で素早い。

②研究の目的は、金城花子ツイッターの宣伝なのか、SNS をどう広報利用するか、なのか? ⇒両方目的である。

2. Google ストレートビューで地域 PR

(1)発表者: 4名 入野 京、籠屋 美紅、関沢 咲花、松本 愛望

(2)概 要: ①Google のタブレットを使うと「フォトスフェア」形式の写真をとることができ、自分で撮った写真で施設や地域を アピールできる。

②360°の視界を表現できる。 ③失敗写真や手抜く写真を使用した時の問題点など。

(3)質問等: ①「フォトスフェア」の値段はいくらぐらいか? ⇒ タブレットを購入しなければならないが、ソフトは無料である。 ②どんなところを取材したいか? ⇒ 野々市本町。白山など。

3. アスリート (種目別) にとって特に必要な栄養素

(1)発表者: 3名 村上優、相場みなみ、中村萌美

(2)概 要: ①各種の栄養素の働きや特色、それを含む食品の紹介

②今後の研究課題

(3)質問等: ①この研究をすることによって自分自身で何か変わったことは? ②日本人と外国人のアスリートの体格の違いによる栄養的違いは?

4. 若者視点でのアウトドアスポーツの魅力と問題点 in 石川 一登山 パラグライダー ラフティング スノボ 釣り 一

(2)概 要: ①石川県内のアウトドアスポーツ施設を実際に体験する中で若者視点での「魅力」と「問題点」を提言する。

②現地の説明やパンフレットで分りにくい点はインターネットで調べる。

(3)質問等: ①誰に対してアピールする視点なのか。

②綿が滝の近くにサイクリングロードがあるが是非そこも対象に入れて。

5. 夫婦の役割分担 ~良妻賢母から~

(1)発表者: 4名 下野 亜衣、永島 絵梨、本澤 小春、山内 香澄

(2)概 要: ①夫婦の役割分担の歴史に触れ、「良妻賢母」について報告。

②専業主婦と夫婦共稼ぎで役割分担は異なる。

③仕事と家事や育児の分担について、女性の社会進出とからめた研究が後期の課題。

(3)質問等: ①あなた達自身の将来の結婚観は?

・30 までに結婚、子供は2人ほしい(1人)。

・25までに結婚、子供は3人ほしい(3人)相手は安定的な職業に人

②結婚後も働くか、専業主婦を希望するか。離婚が増加する世の中で、女性にとっての選択が必要である。

6. 若年女性の貧困について

(1)発表者: 3名 滝中実紅、寺田 彩夏、皆本 悠

(2)概 要: ①ブラック企業とは、ブラックアルバイトなど。

②貧困状態に苦しむ若い女性が増えている実情に関する報告。

②アルバイトを掛け持ちする女性、シングルマザー、非正規雇用で働く女性、ブラック企業で働く女性について実例報告。 うつ病に陥るケース。

(3)質問等: ①若年女性の「若年」の年齢的範囲は⇒30歳未満

②ブラック企業に関する質問

コメンテータより

・西田様:ビジネス実務学科ということなので、ビジネスとしての観点から言えば、誰が得をするのか広い視点で研究テーマを設定し、研究していってほしい。さらに、メリットだけでなく、デメリットも調べ、対比するとよりよい。2月の発表に向けて頑張ってほしい。

・八田様:日本の離婚率は 30%になっているが、女性が不利になっている。女性の人生設計としては、大学卒業後は長期に働くか専業主婦になるかの選択をしっかりしてほしい。子育てを選択したなら 3 人~4 人を育てていってほしい。

・加藤様:調査の目的、結果に至るまでの道のり、考えたことをもっとわかりやすく発表できるようになってほしい。結果に基づいた中身があっていないものがあった。調査の目的、考えたこと、結果のストーリーをたてて発表するようにしていってほしい。

参考: 平成26年度「金城ビジネス学会 第5回年次大会」発表プログラム

「金城ビジネス学会」第5回年次大会(産学連携ゼミナール発表会)

平成27年2月12日(木)

平成27年2月12	日(木)	ダイムナーブル			
	社会福祉学部棟S110会場	発表者		社会福祉学部棟S207会場	発表者
9:00 ∼ 9:20	開会式 挨拶 金城大学短期大学部 学長	加藤 真一			
9:20 ∼ 9:35	A1 戦略~	井村 駿天、吉村 沙也香	В1	夫婦の役割分担 ~良妻賢母から~	下野 亜衣、永島 絵梨、本澤 小春、山内 香澄
9:35 ∼ 9:50	A2 しまむらとユニクロの流通戦略	堀田 沙紀	В2	若年女性の貧困	滝中 実紅、寺田 彩夏、 皆本 悠
9:50 ~ 10:05	A3 アスリート(種目別)にとって特に必要な栄養素	相場 みなみ、村上 優、 中村 萌美	ВЗ	北陸新幹線で北陸観光はどうなる	山﨑隆宏
10:05 ~ 10:15	休憩			休憩	
10:15 ~ 10:30	A4 腐敗しはじめたリンゴ ~アップル経営戦略の 正念場~	早崎 美里、松井 菜摘	В4	タブレット活用方法 ~卒業旅行~	小泉 志穂子、清水 美帆
10:30 ~ 10:45	A5 金城キャンパス内の鳥類調査 ~あっ! あの 鳥はなに?~	岩倉 瑞穂、奥澤 由加里、 田中 美咲、明嵐 咲樹、 安田 朱里	В5	3D人物フィギュアの製作	石塚 眞子、大野 祐実、 金子 実紗、山田 さくら
10:45 ~ 11:00	A6 金城短大生にオススメする恋愛スポット ~♡ 石川・富山で恋愛成就♡~	窪田 梨花、渋谷 愛、 早水 綾香、長船 映莉	В6	3D「ゆるキャラ」フィギュアの製作	川坂 恵美、東 友里恵、 本多 彩絵、山田 栞里
11:00 ~ 11:10	休憩			休憩	
11:10 ~ 11:25	A7 電子カルテシステムを普及させるには	荒木 のどか、川田 唯衣、 五間長 彩加、堂 彩音	В7	VOCALOIDに喋らせる ~人間らしく話す事に挑戦~	稲村 茜璃、畠 紗貴、 四月朔日 瑞貴、山本 美奈
11:25 ~ 11:40	A8 医師事務作業補助者の現状と今後の課題	中道 唯、布村 愛佳、 若林 ゆり子	В8	白山市に興味をもってもらう映像制作	有馬 由里香、宮竹 珠里、 山口 侑稀
11:40 ~ 11:55	A9 Let's guide Kanazawa ~来まっし、見まっし、 知りまっし~	石坂 美優、乾川 麻美、 小浦 真梨子、篠塚 遥香	В9	コンピュータを用いたコンテンツ制作	大平 早衣子、杉谷 安惟、 中田 茅佳
11:55 ~ 13:00	昼休憩			昼休憩	
13:00 ~ 13:15	A10 Youはなにしにニッポンへ?!	奧村 麻椰、北崎 百莉、 小林 智香、橋野 日菜子、 吉田 恵	B10	Twitterを利用した広報活動 @金城花子	田地 祐美奈、友田 菜々花、 橋田 日菜子
13:15 ~ 13:30	A11 クレーム対応研究「身近なクレーム事例の分析報告」	王 坤、高平 祐太、 安田 依織	B11	Googleマップストリートビューで地域PR	入野 京、籠屋 美紅、 関沢 咲花、松本 愛望
13:30 ~ 13:45	A12 クレーム対応研究「保育園・幼稚園の訪問調 査報告」	坂井 佑衣、門馬 由佳	B12	若者視点でのアウトドアスポットの魅力と問題 点 in石川	中村 萌美、屶網 亮介、 山本 脩登
13:45 ~ 13:55	休憩			休憩	
13:55 ~ 14:10	「朝顔に つるべとられて もらひ水」の句につい A13 て	森 綾美	B13	集中力を高めるα波の研究	坂井 麻美弥、四十万 朋子、 宮川 綾乃
14:10 ~ 14:25	A14 白山ろくでイベントを企画してみる	越多 江里香、林 郁魅、溝口 彩弥、松浦 早紀	B14	電子掲示板の改良と学内サービスアプリの開 発	北本 颯希 瀬戸 由佳梨 豊蔵 玲緒菜 鼠田 祥子
14:25 ~ 14:40	A15 「観光マーケティング」やってみた!	川端 彩花、坂本 志帆、 鈴木 可菜、田村 莉奈、 脇本 莉歩	B15	金短マップの改良	川本 真衣、中田 茉奈美、 永原 茉実、橋田 佳那子、 横山 結菜
14:40 ~ 14:50	休憩			休憩	
14:50 ~ 15:50	ポスターセッション(S106)			ポスターセッション(S106)	
16:00 ~ 16:30	閉会式 挨拶 金城大学短期大学部ビジネス	実務学科長 岡野 絹枝			

【幼児教育学科】

(1)「育ちプログラム」による学生の人間関係力の向上

「育ちプログラム」部会 部会長 米川 祥子

事業内容

学生が"育てられる者"から他者を"育む者"に成長するためのプログラムである。財団法人いしかわ子育て支援財団等諸団体との連携を軸に、学びの場を構築し、学生が体験学習を行う。 それらを通し、保育者としての規律性、働きかけ力、柔軟性などの人間関係力を培う。

平成 26 年度取組実績

1. コミュニケーションセミナー

【日 時】4月12日(土)9:15~11:45、13:00~15:30

【講 師】小峰直史氏(専修大学文学部人文・ジャーナリズム学科 教授)

【テーマ】「保育者に求められるコミュニケーション能力とは何だろうか~はじめの一歩~」

【対 象】幼児教育学科1年生

午前(78人)・午後(78人)に分かれて、新入生全員を対象にコミュニケーション実習を行った。

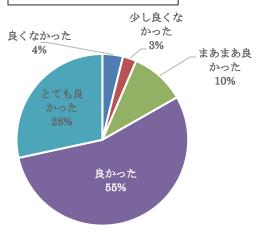
【ねらい】汎用性の高いエクササイズを体験することで、コミュニケーションをとる際に感じる抵抗感をとり、コミュニケーションのもつ豊かさ(愉しさ)と難しさを味わう。加えて、保育者に求められるコミュニケーション能力について考えるきっかけを提供する。



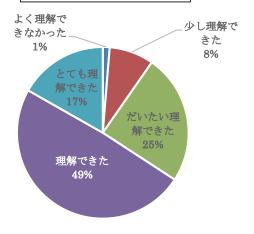


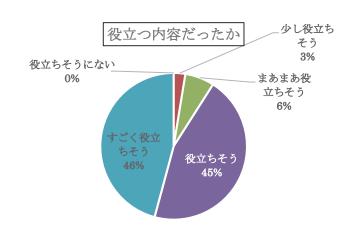


受講態度はどうだったか



どのくらい理解できたか





【担当者所見】

入学間もない時期ということで、参加学生は欠席・遅刻者もなく(1人のみ発熱)、真摯に取り組む姿勢であった。講師の言葉にも集中して耳を傾けており、ふり返りには講座の主旨に触れた内容が具体的に記されている。

「人として、保育者として成長していきたい」という思いを強くできた時間になったようだ。

昨年の5月に本セミナーを開催した時は、欠席者(無断欠席もあり)が167人中15人であった。この1か月の違いに、新入生の心持ちの違いを感じる。

本セミナーにて、グループワークの手法を具体的に理解し体験できたので、その後の各種授業で行われるグループワークにも、違和感なく積極的に取り組む姿勢が維持された。

2. コミュニケーション力強化を意識した授業展開

<親子とのかかわり体験>

1年通年授業「乳児保育」にて、乳児をもつ親子と学生との関わり体験を取り入れた。

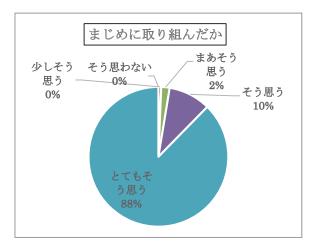
- 【ねらい】・親子と直接かかわり(立場の違う者とのかかわり)、コミュニケーション力を育む。
 - ・乳幼児と直接かかわり、発達を確認する。
 - ・将来子育て支援者になる者として、親御さんと直接かかわり"保護者"を理解し、 "保護者"に対するプラスイメージをもつ。

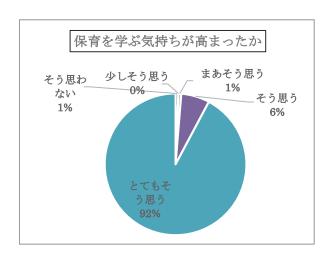
【実施日】通年授業「乳児保育」(担当:酢谷)にて

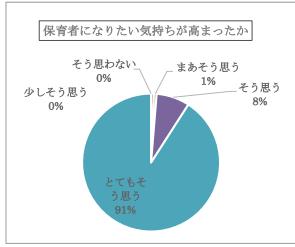
6月17日(火)10:40~12:10、13:00~14:30 1年A組·B組 1~21番6月24日(火)10:40~12:10、13:00~14:30 1年A組·B組22~40番7月1日(火)10:40~12:10、13:00~14:30 1年C組·D組 1~21番7月8日(火)10:40~12:10、13:00~14:30 1年C組·D組22~39番











【担当者所見】

一度だけ、約40分程度のかかわり体験であったが、どの学生も事後報告に、感動と保育への前向きな姿勢を得たと書いている。

実習前であり、保育の学びを始めて間もない 初年次の段階であるからこそ、このふれあい体 験に向ける誠実さや事後の感動の高さが得られ たものと推察する。

<保護者と話そう>

2年後期授業「保育相談援助」にて、子どもをもつ保護者との話し合いを取り入れた。

【ねらい】園に子どもを預ける親から直接話しを聞き、様々な思いを抱く保護者の存在を知り、 将来子育て支援者になる者として、"保護者"を理解しようとする姿勢をもつ。

【実施日】「保育相談援助」(担当:五十嵐)にて、

11月10日(月)9:00~10:35(2年D組)参加保護者6人

11月11日(火)9:00~10:35(2年C組)参加保護者6人

11月14日(金)9:00~10:35(2年B組)参加保護者6人

11月14日(金)10:40~12:15(2年A組)参加保護者6人





我が子を幼稚園や保育園に預けている保護者を招いて、学生とグループディスカッションを行う という形で行った。直接保護者から保育についての温かなエピソードや意見を聞いて、春からの就業 への不安感が和らいだとの感想が多かった。

<グループワーク型授業の展開>

在学期間通して、グループワークを取り入れた授業を増やした。

グループワークを取り入れた授業

1年生:「基礎教養」「教育概論」「障害児保育 I 」「教育相談」「乳児保育」

2年生:「保育指導法」「保育実習指導B」「幼児音楽」「保育内容 健康」

「保育の心理学Ⅱ」「特化 乳児保育・障害児保育・美術」

3. 幼児教育学科教員セミナー

【日 時】8月27日(水) 1部:10:00~12:00、2部:13:00~16:00

【講師】小峰直史氏(専修大学文学部人文・ジャーナリズム学科 教授)

【テーマ】「学生が主体的に学ぶための授業の在り方」

【対象】幼児教育学科専任教員及び非常勤講師21人(専任:14人、非常勤:7人)







【アンケート結果】本研修は、目的や期待に対して満足できる内容でしたか?

1) 大変満足 10 人

2) 概ね満足 4人

3) やや不満足 なし

4) 不満足 なし

*記載なし 2人

2年間にわたり、学生対象に講座を受け持っていただいた小峰氏を講師に迎え、GP 最終年度における集大成として教員を対象にした講座を開催した。保育業界に適応し得る学生養成のあり方を検討・実践する中で、教員側の「授業の在り方」について考える場を設けることができた。教員が学生の"学ぶ"体験を実感し、自らの授業展開の技法の幅を広げることが目的である。

専任・非常勤合同で研修会を開催することで、本学科の授業を担当する者としての協働意識が深まったように感じる。本研修は、授業技術についてもさることながら、教員同士の関係作り、意識の共有ということに有効な時間であった。また、非常勤の教員は、このような授業技術についての研修を受ける機会が少なく、大変刺激的であったようである。

平成 24 年度~26 年度取組総括と今後

本取組は、学生が"育てられる者"から他者を"育む者"へと成長するために、保育者としての規律性、働きかけ力、柔軟性などの人間関係力を培うことを目的とした。

そのために、保育現場との連携力強化を通して、学生が主体的に学びながら、実践的な保育者 養成を目指した教育体制の充実を図っていきたいと考えた。

具体的には、以下にあげるコミュニケーション力を育むグループワークや体験学習など、学生 が主体的に学ぶ場を構築し、体験のふり返りを通して、学生自身の変容を確認した。

1. 学生対象「コミュニケーションセミナー」

【平成24年度】『人間関係構築力を高めるヒューマン・コミュニケーションセミナー』

日時: 平成25年2月18日(月)

対象: 幼児教育学科2年生 88人

講師:高塚人志氏(鳥取大学医学部総合医学教育センター准教授)

【平成25年度】『保育者に求められるコミュニケーション能力とは何だろうか

-はじめの一歩-』

日時: 平成 25 年 5 月 25 日 (土)

対象: 幼児教育学科1年生 152人(欠席者15人)

講師:小峰直史氏(専修大学文学部人文・ジャーナリズム学科 教授)

『相手の身になるということ-保育者に求められるコミュニケーション

能力とは一』

日時: 平成 25 年 7 月 20 日 (土)

対象: 幼児教育学科2年生 125人(欠席者31人)

講師:小峰直史氏(専修大学文学部人文・ジャーナリズム学科 教授)

【平成 26 年度】『保育者に求められるコミュニケーション能力とは何だろうか

-はじめの一歩-』

日時:平成26年4月12日(土)

対象: 幼児教育学科1年生 156人(欠席者1人)

講師:小峰直史氏(専修大学文学部人文・ジャーナリズム学科 教授)

2. コミュニケーション力強化を意識した授業展開

<親子とのかかわり体験>【平成25年度】【平成26年度】

1年通年授業「乳児保育」にて、乳児をもつ親子と学生との関わり体験を取り入れた。

<保護者と話そう>【平成25年度】【平成26年度】

2年後期授業「保育相談援助」にて、子どもをもつ保護者からの聞き取りを取り入れた。

<グループワーク型授業の展開>【平成25年度】【平成26年度】

在学期間通して、グループワークを取り入れた授業を増やした。

グループワークを取り入れた授業

1年生:「基礎教養」「教育概論」「障害児保育 I 」「教育相談」「乳児保育」

2年生:「保育指導法」「保育実習指導B」「幼児音楽」「保育内容 健康」

「保育の心理学Ⅱ」「特化 乳児保育・障害児保育・美術」

3. 教員対象セミナー

【平成26年度】「学生が主体的に学ぶ授業を考える」

日時:8月27日(水) 13:00~16:00

対象: 幼児教育学科教員 21 人(常勤:14人、非常勤:7人)

講師:小峰直史氏(専修大学文学部人文・ジャーナリズム学科 教授)

産業界ニーズ GP 取組初年次では、産業界委員や外部講師からの助言より、「コミュニケーション力を高めるためには様々な立場の人と関わり合う体験を増やすこと」と学び、異学年や学外の人々と関わり合う時間をできるだけ多く設けることにした。

平成25年度より新入生に対して行ったワークショップを中心にした講座では、新入生の仲間づくりがスムーズに行われることもさることながら、①このような講座は入学直後に行う方が学生への影響力は大きく、保育への意識の持続性も高い、②入学直後にグループワークを経験することにより、その後授業内でのグループワークへの抵抗感が少ない、といった傾向が示された。

乳幼児をもつ保護者を招いての授業展開では、学生に多くの刺激と意欲を湧き立たせる効果 を得た。

そして、学科内教員が外部講師を招いて行う研修では、専任と非常勤講師がともに「学生が 主体的に学ぶための授業展開」について考えることができ、授業実践のふり返りと研鑽の機会 になった。我々教員自身が、学外の方々と関わり合い刺激を受けることができたことが何より 大きな成果の一つであり、今後の財産になり得るであろう。

これらの財産を、今後も絶えさせることなく、さらに発展させていきたい。具体的には、以下の課題をあげる。

- 入学直後の「コミュニケーションセミナー」の継続
- 初年次教育の充実
- 学生が主体的に学ぶための授業展開の工夫
- 教員研修の継続

(2)地域との連携強化によるフォローアップ講座の充実

「フォローアップ講座」部会 部会長 水上 和子

事業内容

石川県社会福祉協議会等と連携し、保育士を目指す在学生から就労後成熟期を迎えるに至るまでのキャリア形成を支援する「保育士フォローアップ講座」を開講する。このことにより、保育現場での主体性、考察力の向上、さらに職場でのチームワーク力という社会人基礎力の養成を図る。

平成 26 年度取組実績

1. 実施項目

平成26年度は、過去2年度の取組を踏まえて、下記の3項目の活動を実施した。

(1)「フォローアップ講座」 平成 26 年 08 月 31 日 (日) 09:30~12:30

(2) 「先輩と話そう意見交換会」平成26年11月20日(木) 15:30~17:00(乳児保育)

平成 26 年 11 月 27 日 (木) 14:40~16:10 (音楽)

平成 26 年 12 月 18 日 (木) 13:00~14:30 (美術)

平成 27 年 01 月 29 日 (木) 13:00~14:30 (障害児保育)

2.「フォローアップ講座」(就職後半年の卒業生と在学生のともに学び語る場)

(1)講義の受講

講座:「主訴をつくり直す」~子どもが生きる世界をともに生きる~

講師:和泉美智枝 教授

対象:就職後半年の卒業生と、幼児教育学科2年生(実習中の学生を除く)

目的:就職後、保育者として従事している卒業生に対し小さな躓きの内に問題解決の糸口を提供する。また保育現場で働く卒業生と保育者を目指して勉学中の学生が、一緒に講座に参加しともに学び意見交換をすることで、より深く保育を学ぶ相乗効果を期待する。

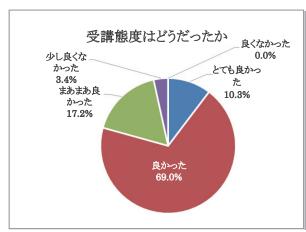
参加:総数88人(卒業生29人、2年生57人、1年生2人)

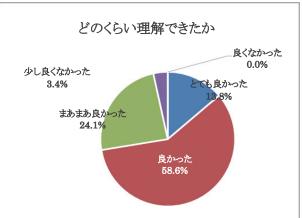
内容:最初に受けた講義内容は、新保育制度の動向についての説明、障害観の復習、さらに特別支援教育は治療優先の時代に移行していることの説明である。様々な状況にある子どもに柔軟に対応して、保育で困っている子は保育で救うとの内容であった。 受講者は熱心に受講した。

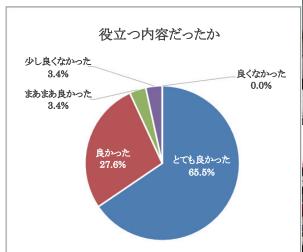
(2) グループワーク

講義の後、ファシリテーター役の教員を交えてグループワークを行い、職場の現状を 踏まえて、熱心に討議が行われた。卒業生、在学生はともに興味深く有意義な体験であ ったと感想を述べている。

(3) アンケート調査結果 (フォローアップ講座) ①アンケートデータ集計





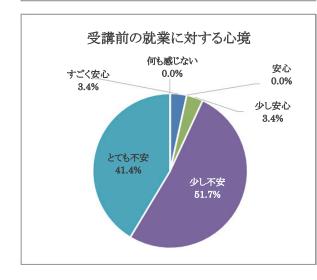


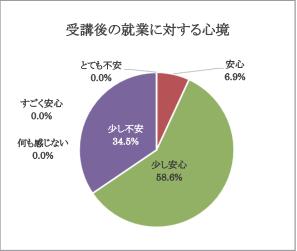












②アンケートデータ解説 (フォローアップ講座)

1)受講態度	(とても良かった) + (良かった)	79.3%(前年84.2%)
2)理解度	(とても理解できた) + (理解できた)	72.4%(前年84.2%)
3)今後の役立ち	(すごく役立つ) + (役立つ)	93.1% (前年 94.5%)
4)心境(前)	(とても不安) + (少し不安)	93.0% (前年 79.0%)
5)心境(後)	(とても不安) + (少し不安)	34.5% (前年 26.4%)
6)不安改善	((前) - (後))	58.5% (前年52.6%)

受講態度、理解度は昨年と比較して数値が低下はしているが、それぞれ80%近く70%超えとなっており、十分な数値である。今後の役立ちについては、90%を超えて評価している。不安についての事前、事後の改善は、60%近くとなっており効果的であることが示された。これは、前年についても同様である。

3. 「先輩と話そう」意見交換会

(1) グループワーク

講師:各特化教育ごとに、本学卒業生5人程度で実施した。

対象: 幼児教育科2年生(154人)

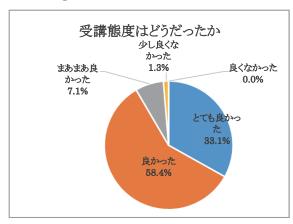
目的:特化教育の授業の中で、現職保育者とグループワークを行い、特化教育が現場で どう生かされているか等の意見交換や、学生に社会人としての心構えを持っても らうこと、就労に対しての不安を軽減することを目指す。

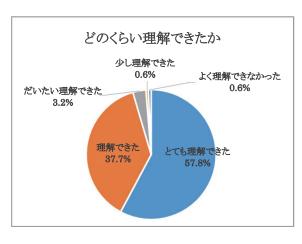
参加:総数 154人(障害児保育 44人、乳児保育 34人、美術 38人、音楽 38人)

実施: グループワークの進め方は、各特化教育担当教員に一任して実施した。それぞれ に熱心な討議が行われ、学生は勿論、卒業生にとっても有意義だったとの感想が あった。

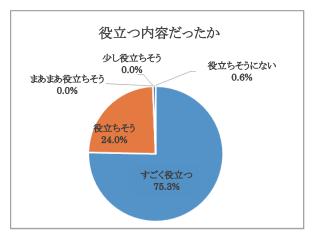
(2)アンケート調査結果(先輩と話そう意見交換会)

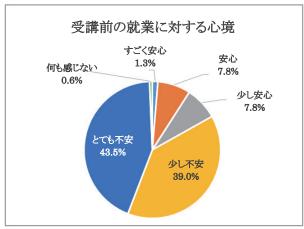
①アンケートデータ

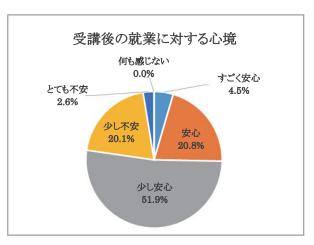












②アンケートデータ解説(先輩と話そう意見交換会)

1)受講態度	(とても良かった) + (良かった)	91.6%	(前年86.8%)
2)理解度	(とても理解できた) + (理解できた)	95.5%	(前年 92.3%)
3)今後の役立ち	(すごく役立つ) + (役立つ)	99.3%	(前年 98.1%)
4)心境(前)	(とても不安) + (少し不安)	82.5%	(前年72.3%)
5)心境(後)	(とても不安) + (少し不安)	22.8%	(前年22.8%)
6)不安改善	((前) - (後))	59.7%	(前年49.5%)

受講態度、理解度は昨年と比較して数値が少し向上し90%超えとなっており、十分な数値である。今後の役立ちについては昨年に引き続き高い評価を得て、ほぼ全員が役立つとしている。就業に対する心境については、受講後の改善が60%近くとなっており、効果的である事が示された。今回も、学生は昨年と同様に全体として高い評価をしていた。この取組が非常に効果的であることを示している。

4. 「育ちプログラム」部会・「フォローアップ講座」部会による合同会議

開催日時:平成26年7月31日(水)13:30~15:00

内 容:3年間の活動を取りまとめ、産業界から受け入れる立場としての意見や今後の 取組についての提案などして頂いた。特に地域に受け入れられている、金城短 大らしいカラーの出る教育を期待しているとの言葉を頂いた。

平成 24 年度~26 年度取組総括と今後

平成24年度後半から、石川県社会福祉協議会等と連携し、保育者を目指す在学生から就労後成熟期の卒業生にいたるまで、保育者としてのキャリア形成を支援した。また、石川県や白山市との連携において、保育現場で学び保育の専門力を高める取組を行った。

取組内容は「社会人講話」「フォローアップ講座」「先輩と話そう」である。

1. 社会人講話

目 的:授業で学べない実際の現場の状況や、長年の経験に基づいた価値ある事象の講話 を聞き、職業人となる心構えを持つ。

第1回: 平成24年12月4日(火)

講話:「保育現場に勤めるということ」

講師:和田節子 青竜幼稚園園長

山本真里子 額小鳩保育園副園長

内容:保育現場より2人の先生を招聘して講話を実施。学生は保育者になる心構

えなどを聞いた。

第2回: 平成25年4月4日(木)

講話:「保育現場に勤めるということ」

講師:木村康治 真行寺六美保育所 所長

講話:「一年後、よりよい社会人となるために」

講師:宮川昌江 株式会社シーピーユー 代表取締役社長

内容:実際の保育現場の状況や広く社会人となる心構え、仕事に対する意義など を学んだ。

アンケート結果より、受講態度、理解度は 60%以上の学生が熱心に聞けて理解できたとしている。また今後に役立つと約 80%が回答し、就業前の不安の改善は 30%に及んだ。学生に前向きな気持ちを抱かせられた。

2. フォローアップ講座 (就職後半年の卒業生と在学生のともに学び語る場)

目 的:就職後半年の卒業生が小さな躓きの内に解決の糸口を得るための学びの継続と、 卒業後、保育現場に出る学生がともに学び意見交換をすることで相乗効果を期待 し、より深く保育を学ぶ機会とする。

第1回: 平成25年8月25日(日)及び平成25年9月1日(日)

講話:障害児とともに育つために

講師:和泉美智枝 教授、中村明成 准教授

内容:講話による問題提起に加えて、卒業生から様々な意見を聞く機会となりと もに学ぶ相乗効果がみられた。

第2回:平成26年8月31日(日)

講話:主訴を作り直す~子どもが生きる世界をともに生きる~

講師:和泉美智枝 教授

内容:卒業生は、問題解決の糸口を探るように熱心に受講した。その姿は学生に も良い影響を与えていた。

アンケート結果より、受講態度は約80%、理解度は70%を超えており、熱心に取り組み、よく理解できたとしている。また、90%以上が今後の役に立つとしており不安の解消も約60%になっている。学生の資質アンケート調査においても主体性、働きかけ力、実行力など、少し成長できたと答えている。また、卒業生も学生と意見交換をする事で、初心を思い出して努力する意欲が出たと感想を述べている。学生は現場の生の声を聞くことができ、大変だけどやりがいのある仕事だと改めて実感したとの意見が多かった。

3. 「先輩と話そう」意見交換会

目 的:様々な立場の卒業生とグループワークをすることで、社会人としての心構えや、 就業に対しての不安の軽減を目指すものである。第2回以降は、特化教育の授業 内で行うことで、特化での学びが現場でどのように活用されているかなどの意見 交換を行った。

第1回: 平成25年2月21日(木)

参加:1年生8人、2年生22人、講師(卒業生)8人

内容:学生30人と卒業生8人の意見交換会であった。次回からは多くの学生が参加できるように特化教育の授業内で実施することとした。

第2回:平成26年1月23日(木)

参加: 各特化教育2年生121人、講師(卒業生)21人

内容: 各特化教育ごとに開催することで、参加者に親近感が増し円滑に行われた。

第3回: 平成26年11月20日(木)特化「乳児保育」2年生 講師(卒業生)5人 平成26年11月27日(木)特化「音楽」2年生 講師(卒業生)5人 平成26年12月4日(木)特化「美術」2年生 講師(卒業生)6人 平成27年1月29日(木)特化「障害児保育」2年生 講師(卒業生)5人 内容: 特化教育ごとに別の開催日を設定する等、開催に際して柔軟に対応した。

参加後のアンケート調査結果を 3 回に渡って確認した結果は、次のとおりである。受講態度は(とても良かった)+(良かった)を、理解度は(とても理解できた)+(理解できた)を、今後の役立ちは(すごく役立つ)+(役立つ)を、そして、心境は(とても不安)+(少し不安)を、それぞれ比較した。改善は(心境(前)) - (心境(後))を比較した。

(項目)	(第1回)	(第2回)	(第3回)
1)受講態度	90.0%	86.8%	91.6%
2)理解度	93.0%	92.3%	95.5%
3)今後の役立ち	97.0%	98.1%	99.3%
4) 心境 (前)	80.0%	72.3%	82.5%
5)心境(後)	3.0%	22.8%	22.8%
6)不安改善	77.0%	49.5%	59.7%

受講態度は約90%、理解度は90%強、今後の役立ちは100%に近い数値であった。 高い評価を得ていて、効果的であったことが確認できる。不安改善についても、49.5%~77.0%となっており、保育者になる意識の向上になったと考えられる。また、グループワークなどの双方向の学びが効果的であり、卒業生においては成熟期を迎える保育者としてのキャリア支援に繋がった取組ができたと思われる。

4. 「フォローアップ講座」部会議の報告と今後の課題

この3年間での部会を振り返り、各取組ごとに目的や成果について表記した。この間「育ちプログラム」部会及び「フォローアップ講座」部会とともに合同会議を計4回開催し、産業界委員から受け入れる立場としての意見や提案を頂いた。学生は、講話を聞き、様々な年代の本学の卒業生と意見交換することで、傾聴力、状況把握力、課題発見力を身につけることができたと答えており、取組が保育現場での学びや保育の専門力を高める原動力となったと確認できた。

平成22年度より継続しているフォローアップ講座では、離職率を下げることを目標に、今後も実施していく。また、産業界からは、金城短大のカラーの出る教育を期待したいとの言葉を頂き、特化教育内における意見交換会を継続する事とした。

【美術学科】

(1) 自活のためのビジネス教養と専門教養の涵養

「自活のためのビジネス教養」部会 部会長 新井 浩

事業内容

美術系大学生の就業意識は、どの大学でも高いとは言えず、早期に自活意識を高める取組が必要である。キャリアセミナーの授業を軸に、美術系企業、一般企業の見学を含め、デジタルポートフォリオの制作、アートショップでの経営意識育成など、具体的な体験学習を実施することにより、ビジネス教養と専門教養を涵養し、社会的・職業的自立心の養成を強化する。

平成 26 年度取組実績

1. 東京アート研修旅行の実施

地方の短大生が東京のアートイベントや展覧会を体験することで、制作意欲と意識の向上を 狙う。平成25年度は、デザインフェスタの見学を中心に計画し、参加学生からは好評を得たが、 一方で学生自身による展示をしてみたいという要望があった。それを受け、今年度は見学だけ に留まらず、東京ゲームショウへの学校ブース出展を計画し、学校コーナーにおいて、美術学 科の取組を紹介する金城短大ブースを出展することができた。

●「東京アート研修」&「東京ゲームショウ 2014」出展

日 時:9月21日(日)~22日(月)

参加者: 学生 40 人名 (1 年生 24 人·2 年生 14 人 研究生 2 人) 引率教員 3 人

行き先:東京ゲームショウ2014 国立新美術館 他

東京ゲームショウは、アミューズメント産業の活性化を目的とした「アジア No. 1 の情報網羅性」と「世界最大級のイベント」を掲げ、昨年は27万人を超える来場者と352の企業・団体が参加した。昨年参加したデザインフェスに比べるとより企業色の強いイベントである。多くの学生が進路として興味を持っている「ゲーム/アニメ」といったコンテンツ産業の最新情報に触れたり、また同年代の学生の作品などを目にできる機会でもある。

今年度は、より企業の出展が多く、学生の参加が 多く望めそうな夏期休暇中の実施を念頭に置き、東京 ゲームショウの見学並びに学校コーナーにおけるブー スの出展を計画した。学生の参加に際しては、東京

○東京アート研修旅行日程

9月20日(土)	21:30	バス配車
3720G(I)	22:00	金城大学
	9:00	幕張メッセ国際展示場
		東京GAME SHOW 2014
9月21日(日)		
3/12/10(0)	19:00	ホテルへ
	9:30	出発
	10:00	美術館研修(六本木)
		見学後 各グループ毎
9月22日(月)		自由行動
	15:00	出発
	22:30	金城大学

研修旅行の意義、ゲームやキャラクター商戦に関する事前研修などを行った。また、好きなゲームのブースをまわるだけに留まらないよう、会場の出展傾向などからゲーム業界の流行などについて事前学習をし、その中でブース出展の際に無料配布するオリジナルグッズを企画し、参加学生で制作を行った。結果、事前の共同作業においても学年を超えた交流に繋がり、意義があったように思う。

〇事前研修にてオリジナルグッズ (缶バッチ) を作成





○学科や学年を超えて共同作業による交流も





〇アンケートやグッズ配布を積極的に行う学生





石川県内にもゲーム制作企業は数社あるが、求められる技術は高く就職に繋がるケースは少ない。また、学内のカリキュラムではグラフィックデザインの授業が中心で、企業から求められている学生像も把握しきれていなかった。今回、東京ゲームショウに参加する学校ブースを見学し、他県の学校と情報交換をしたことで、本学の学生が描くイラストに関しては、東京の企業でも充

分通用することが体感できた。一方、近年広まっているゲーム開発のプラットフォームである Unity によるゲーム制作の広がりに関しては全く対応できておらず、石川県での情報不足を感じた。

金城短大ブースでは「よく買うグッズの種類や適正価格についてのアンケート調査」を行い、 回答していただいた方にオリジナルグッズとして制作した缶バッチをプレゼントした。

〇アンケート結果

	東京には何回行った事がありますか?				
	初めて	1、2度いったことがある	年に1、2度行く		
	4	24	4		
	本研修に	参加した決め手は何です	か?		
	イベントに行きたかった	東京に行きたかった	金額が安かった	その他	
	19	10	4	3	
	本研修に参	加した事が創作意欲に繋が	がったか		
とても思う	やや思う	どちらとも言えない	あまり思わない	全く思わない	
11	19	1	1	0	
	これを機にさら	にイベントに参加したいと	思いますか		
とても思う	やや思う	どちらとも言えない	あまり思わない	全く思わない	
18	14	0	0	0	
	缶バッチ配布やアンケー	-ト調査を行うことにやりが	いを感じましたか	?	
とても思う	やや思う	どちらとも言えない	あまり思わない	全く思わない	
7	18	5	1	0	
美術館を見学したことが創作意欲に繋がりましたか?					
とても思う	やや思う	どちらとも言えない	あまり思わない	全く思わない	
10	18	3	1	0	

	自由記述	人数
1	他のイベントに行ってみたい(デザインフェスノコミケ)	7
2	自由時間がもっと欲しい	5
3	日数を増やして欲しい	5
4	満足してる/楽しかった	5
5	もっとこういうイベントを増やして欲しい	3
6	学校としてのアピールが足りない	3
7	また行きたい	2
8	ホテルの朝食が良かった	1
9	日数がちょうど良かった	1
10	ブースでグッズを配布したのは良かった	1
11	もっと美術館をまわりたかった	1
12	バスがせまい	1

回収したアンケートは、今年度に行う「金城アートショップ」で価格やグッズの選定をする際の参考にした。会場内では、学生達が来場者と積極的に関わり、アンケートのお願いに対して来場者から好意的な反応が得られたのは予想外であった。

研修終了後に、参加学生へのアンケート調査を行った。その中で、「イベントへ参加したことが、これからの実習における創作意欲に繋がった」という問いに対し、94%の学生から「とても思う」「やや思う」という肯定的な回答を得た。また、「缶バッチ配布やアンケート調査を行うことにやりがいを感じたか」という問いでは、81%の学生が「やりがいを感じた」と回答した。そのほかに意見として、東京などで行われるアートイベントに参加したいが、個人ではなかなか参加が難しく、学内でもっと企画してほしいという要望も強くあった。

2. キャリアセミナーにおける取組の充実

美術学科では就職支援講座として1年生後期から2年生前期にかけて「キャリアセミナーa」「キャリアセミナーb」を開講しており、1年生の9割以上が受講している。しかし、これまでは就職進学支援部と連動しながらも、その大半を美術学科の就職進学支援部担当者が一人で行っており、授業内容は未整備であった。本取組において、他学科の教員や外部講師などの協力を得て、コミュニケーションワークショップを実施するなど、キャリアセミナーの内容を充実させた。

(1) コミュニケーションワークショプ

日 時: 平成 26 年 12 月 4 日 (木) 14:40~16:15

受講者:美術学科1年生65人

美術学科の学生は、コツコツと仕事をすることを好む傾向が強く、対人的なスキルに欠ける

傾向がある。また、社会人力よりも作品の評価が優先される、という美意識がまだ残っているように感じる(実際に明言される企業もある)。しかし、デザイン現場などと連携をとりながら仕事を進めていく上では、一般企業と変わらず円滑なコミュニケーションを取りながら働ける人材が必要とされている。

今年度は、本学幼児教育学科の米川祥子准教授を講師に、初対面の人に対するコミュニケーションの取り方と相手に伝わる印象について、講義とワークショップを実施した。今までにない授業導入によって、学生達はリラックスしてワークへ入っていき、苦手意識があっても他人とコミュニケーションを取ることの重要性を改めて考える機会となった。

今回、ワークショップを行うにあたって学生へのレクチャーや教室準備、通常授業からの時間変更などやや準備不足であったため、一部の学生は途中で集中力が切れてしまった。会場セッティングや学生への事前のレクチャーの重要性を改めて実感した。次年度以降の教訓として生かしていきたい。

(2)メイクアップ講座

日 時:平成27年1月23日(金)14:40~16:15

講師:資生堂美容部員 4人 受講者:美術学科1年生65人

本学では女子学生が8割を占める。化粧や身だしなみの意識は学生ごとに全く異なり、これまで化粧をしたことがない、という学生も一定数いる。資生堂の美容部員に来学していただき、メイク講座を行っている。この講座は、社会人としてのメイクの仕方に加え、美しい姿勢、身だしなみ、好感を持たれる第一印象など、就職活動を前提としたトータル的な内容となっており、この講座を経て、模擬面接会、企業見学会へと続く構成になっている。

今年度は、男子学生も別教室で受講したが、女子学生に比べ内容がやや薄かったように思う。 これは、次年度への課題である。

○メイクの仕方や身だしなみ、振る舞いについての講座の様子





(3)企業見学会

日 時: 平成27年2月18日(水)12:30~16:30

参加者:美術学科1年生 70人

短大へ進学してくる学生の 9 割以上が地元での就職を希望しており、なおかつ自宅から通勤できる環境を望んでいる。加えて印刷会社やデザイン事務所など制作に携わる仕事へ就きたいという希望を持っている。これに対し、産業界のニーズとしてどれくらいのスキルを求められるのか、また地元にはどういった企業があるのかを知る第一歩として、企業見学会を実施している。

訪問先については、模擬企業ガイダンスでお世話になっている企業や、卒業生が働いている企業を中心に依頼した。引率する教員の広い業種を見学したいという思いから、今回は12企業に依頼をした。開催時期などを考慮したため、受け入れ先の選定に時間を要したが、それが却って新しい訪問先企業の開拓に繋がり、新規で4社から訪問の承諾を得ることができた。

今年度は、事前に行われた模擬企業ガイダンスの効果もあり、訪問先企業において学生達が活発に質問をしたのが印象的であったと、各引率教員から感想を聞くことができた。

●訪問先企業

(製造) EIZO株式会社、ニッコー株式会社、ダートコーヒー株式会社

芝舟小出 (いなほ工場)

(web/印刷) 株式会社中央メディアプロ

(印刷) 株式会社北陸サンライズ、前田印刷株式会社、株式会社田中昭文堂印刷

(映像制作) 株式会社道洋行、株式会社イノセンス

(映像/ゲーム) 株式会社 DMM.com ラボ

(デザイン) カラフルカンパニー株式会社

〇各企業見学の様子









企業見学終了後の学生アンケート結果では、 実際に企業見学することで、事前に調べていったことや、企業に対するイメージが違っていたという意見が多かった。また88%の学生は企業見学によって、就職に対する意識が向上したと回答し、75%の学生が春先から就職準備に向けて動き出すという回答をした。

また、協力頂いた企業の担当者からは、案内 の際大変熱心に語っていただき、学生達は働く ことのやりがいやプライドを感じた事であろう。

〇アンケート結果

	見学	の中で興味が湧き、質問	問した	
質問した	聞きたいこと があったが聞 けなかった	しなかった		
26	19	14		
	自分の気	ロらなかった事をしること	ができた	
とても思う	まあ思う	どちらとも言えない	あまり思わない	思わない
35	23	1	0	0
		自分の想像と違っていた	Ė	
とても思う	まあ思う	どちらとも言えない	あまり思わない	思わない
20	26	9	3	1
	見学前よ	りも就職活動への意欲な	が高まった	
とても思う	まあ思う	どちらとも言えない	あまり思わない	思わない
23	29	6	1	0
春先から具体的に活動しようと思った				
とても思う	まあ思う	どちらとも言えない	あまり思わない	思わない
17	27	13	2	0

平成27年度より日本経済団体連合会による就職協定の改訂が行われ、企業の募集開始時期が後ろ倒しになる。短大生は大学生と活動時期が重なり苦戦することが予想されているが、こと美術学科に関しては、作品集をじっくりと作成できる時間が取れるようになり、今までより焦らずに活動ができるようになるかもしれない。今後、春期休暇中に作品制作集のサポート、希望者にはPhotoshopやIllustrator、3Dソフトのサポートも企画している。

次年度は少人数単位での企業訪問なども実施し、1 年生で芽生えた就業意識を持続していけるよう、我々もサポート体制の改善を図っていく。

平成 24 年度~26 年度取組総括と今後

本部会では、美術学科一番の課題である就職支援を扱った。美術学科の学生は就職活動の開始時期が遅く、卒業間近になるまでなかなか進路について決断できずにいるケースが多い。この傾向は本学だけでなく全国の美術系大学、専門学校でも同様であり、他学科の高い就職率と比べて6~7割の就職率に留まっている。

本部会では①キャリアセミナーの充実 ②美術館やアートイベントへの参加という 2 つの取組を行った。全体には就職支援講座であるキャリアセミナーを充実させ、専門職だけでなく幅広く一般職にも目を向けさせることを目標とした。そして、能力のある学生達にはデザインの精度を高め、更に意識を高く持ち専門職を目指してもらうことを目標に、アート研修旅行を実施した。手探りで始まった取組であったが、学生達のアンケートなどをもとに年々ブラッシュアップし、運営する教員にもひとつの道筋をつけることができた。

1. キャリアセミナーの充実

1年後期から2年前期にかけて開講しているキャリアセミナーの充実を図った。就職進学支援 部担当の美術学科教員が1人で授業を担当しており、内容的に幅の狭いものであった。今回の取 組で就職進学支援部、他学科教員、外部講師など多くの方々から協力頂き、内容に厚みを持たせ る事ができた。







(1) コミュニケーションワークショプの実施

といった教科との連動も考えていきたい。

美術学科の学生が苦手としている「コミュニケーション力」「協働する力」を身につけるよう、本学幼児教育学科の米川祥子准教授、発創デザイン研究所の冨永良史先生に集中講義として年2~3回コミュニケーションワークショップを実施して頂いた。授業後のアンケートではワークショップという能動的に関わらなければならない授業形態に、戸惑いや反発を憶えた学生の感想なども見られたが、一様にコミュニケーションの必要性は感じたようである。また、この講座だけではなく「プレゼンテーション演習」や「コミュニケーション基礎」

(2) 就活のためのメイクアップ講座

美術学科の学生は、化粧をして年代相応の身なりを整えている者と、全くしていない者に 分かれている。「身なりや振るまいが与える印象」について講話して頂き、就職活動用メイク アップ講座を実施した。平成25年度からは男子学生にも実施している。

(3)企業見学会の実施

就職活動の第一歩として、美術学科の学生全員が参加する企業見学会を企画し、卒業生の 就職先を中心に地元企業の見学会を実施した。美術に直接関連した制作系の仕事に限らず、 販売・事務・製造など学生の希望に合わせ、一人が複数企業を見学できるようなラインナッ プとした。学生達は見学会を終えた時点では大きな意欲を示してくれ、大きな成果を感じて いる。3年間で依頼した企業は23社になり、徐々に増加している。今後とも就職活動の第一 歩として継続していきたい。

(4)休暇中の学生支援

短大の長期休暇において、学生はその時間を有効に使えていないと感じていた。初年度は、1年生春期休暇中にデジタルポートフォリオの作成講座を開講した。2年目、3年目はやや後ろ倒しになり、夏期及び冬期休暇中に就職試験を受ける学生に対して、個別対応を行ってきた。就職先が明確に決まっていない、作品集が完成していないなどの理由から、直接的な活動への連動性が低かったことはやや残念である。今後の展開として、学生がいつでも閲覧・活用できる就活ポートフォリオガイドの作成などを考えている。

2. 美術館やアートイベントへの参加

本学へ入学してくる学生は、アニメーションやマンガの影響を受け美術を志す者が多く、美術的見識の狭さを感じていた。そこで、個人では見学しずらい遠方の美術館やアートイベントに触れる機会を増やし、制作意欲の向上につなげたいという目的で企画を進めた。

- ・平成24年度 七尾美術館 ボローニャ国際絵本原画展見学 参加者:学生70人(2年生70人)引率教員2人
- ・平成25年度 東京アート研修 デザインフェスタ見学 参加者:学生28人(1年生18人・2年生10人)引率教員2人
- ・平成26年度 東京アート研修 東京ゲームショウ見学/ブース出展 参加者:学生40人(1年生24人・2年生14人 研究生2人)教員3人

アート研修旅行に参加した学生達からは、このような研修をして欲しいとの意見がだされたことを受け、学園祭において美術学科アートショップとライブペインティングの展示を行う事となった。運営に関しても学生有志が率先的に進行し、学年を超えた交流が生まれた。これまでも個別単位ではこういった取組は見られたが、企画立ち上げから学生が関わり、普段交流のあまり無いグループもまとまって活動できたこと



は無かった。学科で取り組んだことにより、イベントに積極的に参加しない学生達が、同級生から商品化の方法を直接学ぶことができた。東京アート研修旅行から、こういった自主的な取組に繋がったことは大きな成果である。

○今後の課題

GP の取組として3年間、様々な企画を始めた事により、こちらが思い込んでいたよりも学生達は働く事に向かっていくのだという事に気づかされた。一般職の中で美術の力を生かして働く、という働き方においては、日頃の学生生活と仕事の距離が近いほど勤労意欲に繋がるように思う。 平成26年度には、ビジネス実務学科のインターンシップ制度を活用したいという学生がでてきた。学生の希望と技術を見極め、さらなる丁寧な就業支援を継続していきたい。

(2) 産業界からの要請に対する提案取組

「産業界への提案取組」部会 部会長 東田 修一

事業内容

美術学科では、以前より産業界からの制作要請を受託してきたが、テーマの決められた単発的制作に留まっていた。今後は産業界からの要請を受けるだけでなく、美術学科の方から積極的提案を行い、総合的な取組を展開する。この取組により、制作力に加えて、企画力や提案力の強化を目指す。

平成 26 年度取組実績

この部会では、本事業の取組テーマである「アクティブラーニングを活用した教育力の強化」及び「地域・産業界との連携力の強化」に基づき、更に企画力や提案能力を身につけることを目標にしている。

平成26年度は本事業の最終年度ということで、「自活のためのビジネス教養」部会と共同で白山ロータリークラブの協力を得て、2年生全員で地元の加賀の千代女を題材にした「アートショップ」を企画運営することとなった。白山ロータリークラブは、加賀の千代女をテーマに地域活性化を望んでおり、今回の取組と合致した。

加賀の千代女は俳人で、朝顔を題材に多く歌っていることから、出身地の旧松任市では市のシンボルとなっている。しかし、この地にあるにもかかわらず本学学生の認知度は低く、若い世代にはあまり浸透していない事がわかった。そこでまず、加賀の千代女について調べる必要があった。白山ロータリークラブの計らいで、まず全員で10月1日、加賀の千代女ゆかりの聖興寺で住職の講話を聞くこととなった。その後、JR松任駅前にある千代女の里記念館で情報収集することから始めた。

●講話及び見学







ある程度、加賀の千代女についての知識を得た後、デザイン・映像コース、マンガ・キャラクターコース、油画・日本画コース、ファッション・工芸コースの4コースでそれぞれ商品開発に取りかかった。

●商品制作



1. 成果

同時並行で、アートショップ運営に関わる全てのことを全員で行うために、全員の共通認識と全体で取組むべき内容を決めていく必要があった。そこで2年生全員で行う全体会議を開催した。全体会議は最初だけ教員が主導したが、その後の全体会議は学生が中心となって開催された。まず店舗運営に必要なことを話し合い、店舗デザインチーム、マニュアル作成チーム、シフト表作成チーム、売り上げ管理チーム、値札作成チーム、小物準備チームの6チームで仕事を分担した。全体会議では、それぞれのチーム長が主体となって経過報告をし、問題点などを話し合い、情報共有を行いながら運営に向けて動き出した。全体会議は4回行われ、その中でショップロゴの決定やショップスタッフのユニフォームなども決まっていった。また、アートショップの出展場所は、人通りの多いJR松任駅改札出口正面と決まった。美術学科では、これまで学生が全体で話し合う機会はあまり無かったが、この全体会議はアートショップ運営に大きく貢献し、学生の自主性も生まれた。

●全体会議



オープン初日の11月1日は、午前中からオープンに向けて現地にて準備が行われた。店舗デザインチームのデザインをもとに設営が開始された。そして値札作成チームにより商品に値札が付けられた商品を陳列した。マニュアル作成チームにより誰でもできるようにマニュアルが用意され、シフト表作成チームのシフトで動くことになる。また売上げ管理チームにより作成された売上げ管理の書式が用意された。小物準備チームによって運営に必要な小物類も用意された。

●会場準備



そして11月1日から4日までの4日間午後1時から午後6時、「金城アートショップ」が開店した。午後1時、白山ロータリークラブの代表の方々にも参加いただき、簡単なオープニングセレモニーが行われた。白山ロータリークラブの会長挨拶を受けて、学生代表2名が謝辞を述べ、ショップ運営を開始した。









● オープニング及び運営

デザイン・映像コース、マンガ・キャラクターコース、油画・日本画コース、ファッション・工芸コースのそれぞれ特徴ある商品がショップを彩った。具体的には、加賀の千代女を題材にしたアクセサリーや缶バッチ、栞やポストカード、手ぬぐいや T シャツ、マンガ本、食器など多岐に渡った。また、食品やラッピングバスの提案も展示された。

ショップ運営は、それぞれの準備チームのおかげでスムーズに進行した。また学生達は、積極的に誘客や作成したフライヤーを配布し、商品説明を行っていたことが印象的であった。

● 商品







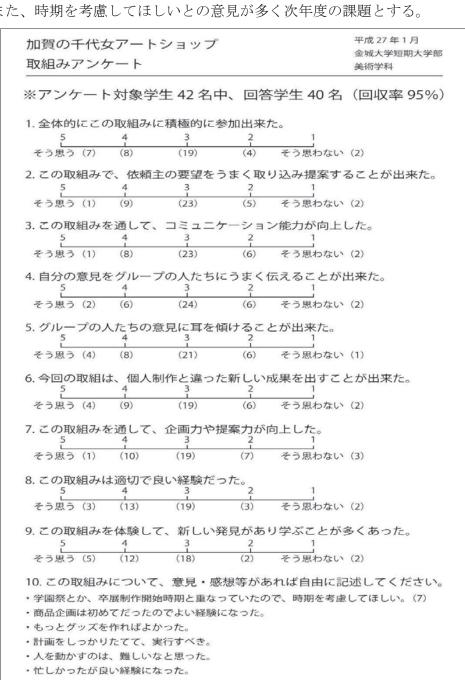
2. 今後の課題とまとめ

外部からの依頼は近年、増加の傾向である。できるだけ対応できるように努力しているが、通常課題との兼ね合いや時期等うまく擦り合わせが必要である。通常課題と抱き合わせになることもあるが、その苦労と体験はそれ以上の収穫をもたらしてくれる。

平成26年度は集大成ということで、2年生全員でアートショップを運営した。最初の導入部分だけを教員が説明したが、その後の全体会議や打合せはチーム長が主体となり学生中心の企画・運営とした。当初、学生中心の運営は心配ではあったが学生達は予想以上のまとまりを見せ、組織としての運営を成し遂げたことは大きな収穫であった。次年度以降も、アートショップは出展予定である。

3. 学生へのアンケート結果

取組終了後、学生へのアンケートを実施した。全体的には中間が多いが「積極的に参加した」「適切で良い経験だった」「新しい発見があり学ぶことが多くあった」の項目は好結果となった。また、時期を考慮してほしいとの意見が多く次年度の課題とする。



平成 24 年度~26 年度取組総括と今後

美術学科の本部会では「地域・産業界との連携力の強化」に基づき、更に企画力や提案能力を身につけることを目標に掲げた。外部からのデザイン依頼を受けてデザインすることに加え、総合的に問題を見つけ出しその解決策を考える能力、デザインを通して提案する能力の向上である。

初年度にあたる平成 24 年度は、加賀フルーツランドへのデザイン提案を行った。加賀フルーツランドは、広大な敷地にフルーツ園が点在し、四季を通じてぶどう狩りやいちご狩り、りんご狩りなどができるレジャー施設である。また、そのフルーツを利用した自社ブランドのワインやジャムなども販売している。

デザイン・映像コース 2 年生 26 人が数人ずつ 8 グループに分かれて提案することになった。問題解決や企画を考える上で、現地視察は最初の取組段階で重要であると考え、まず現地視察を行った。

視察を終え11月に入って、グループごとに話し合いを重ねアイデアを少しずつかためていく作業となった。それらを集約して現実的なプランを練り上げ、全体像が浮かび上がってくる。

グループごとに多少の差はあるが、11 月中旬頃から実作に入った。コンピュータに向かい、デザイン案を具体的に視覚化していき、最終的にはB1 パネル (728mm×1030mm) 3 枚に提案をまとめる作業となった。

12月3日に全員で加賀フルーツランドに再度出向き、グループごとにプレゼンテーションを行った。提案はイベント企画、パンフレット、CM、キャラクター、店内ディスプレイなど多岐にわたった。依頼主の加賀フルーツランドからは高い評価を得ることができた。今後、具体的にデザインや提案が検討され、採用されて行くこととなった。

〈提案例〉



平成 25 年度は、社会福祉法人つばさの会へのデザイン提案を行った。この施設は、障害者 就労を積極的に支援している。その中で大きな柱になっているのが、パンの製造販売であり 店舗も計画中であった。7月にデザイン提案の依頼があった。当初の依頼は、パッケージやロゴマーク、チラシ等を提案して欲しいとのことであったが、集客力アップなどの企画を含めた総合的なデザイン提案を持ちかけた。デザイン・映像コース2年生が数人ずつ7グループに分かれて提案することとした。10月8日に現地視察を行い、その後グループごとにアイデアを出し合い、デザインの実作を経てB1パネル3枚から6枚にまとめた。そして、11月26日に全員でつばさの会に出向きグループごとにプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションはパンの販売店舗や商品のデザイン、移動販売車両やパンフレット、上ブなど多岐にわたり好評であった。今後、様々な形で商品化が予定されている。



〈提案例〉



平成 26 年度は本事業の最終年度ということで、「自活のためのビジネス教養」部会と共同で自山ロータリークラブの協力を得て 2 年生全員で、地元の加賀の千代女を題材にした「アートショップ」を企画運営することとなった。場所は JR 松任駅改札出口正面と決まった。まず全員で 10 月 1 日、加賀の千代女ゆかりの聖興寺で住職の話を聞き、千代女の里記念館で情報収集した。その後、各コースで商品開発に取りかかった。同時並行で、アートショップ運営に関わる全体会議を 4 回開催した。全体会議では、店舗デザインチーム、マニュアル作成チーム、シフト表作成チーム、売り上げ管理チーム、値札作成チーム、小物準備チームの 6 チームに分かれ、それぞれのチーム長が主体となって経過報告や準備等全員で情報共有を行いながら運営に向けて動き出した。



そして、11月1日から4日までの4日間午後1時から午後6時、「金城アートショップ」が開店した。白山ロータリークラブの代表の方々にも参加いただき、簡単なオープニングセレモニー後ショップ運営を開始した。デザイン・映像コース、マンガ・キャラクターコース、油画・日本画コース、ファッション・工芸コースのそれぞれ特徴ある商品がショップを彩った。具体的には、加賀の千代女を題材にしたアクセサリーや缶バッチ、栞やポストカード、手ぬぐいやTシャツ、マンガ本、食器など多岐にわたった。また、食品やラッピングバスの提案も展示された。



○今後の課題とまとめ

外部からの依頼は近年、増加の傾向である。できるだけ対応できるように努力しているが、 通常課題との兼ね合いや時期等うまく擦り合わせが必要である。通常課題と抱き合わせにな ることもあるが、その苦労と体験はそれ以上の収穫をもたらしてくれる。

平成24年度と平成25年度は、5~6人程度のグループごとに提案した。これまで、美術学科での課題制作は個人制作が中心であったが、この取組によってグループ制作を体験できたことは、大きな成果であったと考えている。学生達は、グループごとにティスカッションを行い、一つの方向性を見いだし、仕事の分担を行い、最終制作物まで導きだすことの難しさを体験できた。また、制作にかかる時間や完成度などについては、個人の力だけではでき得ないものであった。チームワーク力による提案ができたことは大きな収穫となった。

平成26年度は本事業取組の集大成として、2年生全員でアートショップを運営した。最初の導入部分だけを教員が説明したが、その後の運営に関する全体会議や打合せはチーム長が主体となり学生中心の企画・運営を行った。当初、学生中心の運営は心配ではあったが、学生達は予想以上のまとまりを見せ組織としての運営を成し遂げた。次年度以降も、アートショップは出店予定である。

2. 教育改善・充実を支える人的体制の整備(全学共通の取組)

(1) 教職員のファシリテーションスキルの養成

「ファシリテーションスキル養成」部会 部会長 瀬戸 就一

事業内容

アクティブラーニング導入にあたり、授業を担当する教員に対し、ファシリテーションスキルの養成を目的とした本格的な研修を実施する。また、本スキルは、産学官いずれの組織においても人事管理・教育に有効であることから、本学事務職員にも研修を実施し、さらに地域・企業関係者にも研修の機会を提供して、大学と地域・産業界双方における教育力の成長を促す。

平成 26 年度取組実績

平成26年度は教員研修会と教職員合同研修会を二つのテーマで企画し、ファシリテーションスキル養成の運営を行った。

1. 第1回「ファシリテーションスキル養成」教員研修会

日 時: 平成 26 年 8 月 4 日(月) 10:00~16:00

場 所:金城大学短期大学部 本棟 A108 教室

講 師: 冨永 良史 氏(発創デザイン研究室 代表)

(ファシリテーター/ワークショップデザイナー)

参加者:22人/38人(参加率58%)、「産学連携人材育成研究会」委員1人

内容:「普通の授業から考える(1)~特別なことじゃなくて。。。~」

- ① 幼児教育学科「基礎教養」実践報告
- ② 美術学科「社会と美術論」実践報告
- ③ ビジネス実務学科「日本語表現」実践報告

まとめ:普通で良いと思う。授業って、こういうものという固い感覚を捨ててみる。 がらりと変えなくてよい。問いかけ、タイミングとか、ちょっとだけ変えてみる。 教師とは学び手である。いろいろな状況から学ぶことができる。

主体性とはどこから生まれるのか?ルールと型を与えて、主体性を考える? 授業に完成形はない。普段の授業の中から、さりげなく、学生の気持ちを考えてみる。 他学科の教員からもアドバイスをもらい、ごく普段の授業のあり方をふり返り、どう すれば、さらに自然体な学びが生み出せるのかを考えてみる良い機会となった。

アンケート結果 回答総数:16件

満足度数:大変満足 5/16 人 (31%)、概ね満足 11/16 人 (69%)

本研修で「得たこと」や「気づかされたこと」等について(抜粋)

- ・頭ごなしで強制するのではなく、学生が主体的に活動し易くなる「問いかけ」がある。
- ・多く伝えたい気持ちを押さえ、わかりやすい授業の重要性。
- ・学科内ではチームワークによる授業実施。それを3学科の教員が共有し、互いの授業に

関心を抱き授業改善に資することができた。素晴らしい「教員チームワーク」である。

- ・グループワークの工夫、学生の参加を引き出す方法、間のとり方も勉強になった。
- ・学生がどういう気持ちで座っているか。知りたいと思うところのポイントなど。
- ・ちょっとしたことで授業の流れや雰囲気が変わるということ。
- ・学生とのインタラクティブがある授業、それは少しの間、少しの工夫でなし得る。

2. 第2回「ファシリテーションスキル養成」教員研修会

日 時: 平成 26 年 9 月 19 日(金) 10:00~16:00

場 所:金城大学短期大学部 本棟 A108 教室

講 師: 冨永 良史 氏(発創デザイン研究室 代表)

(ファシリテーター/ワークショップデザイナー)

参加者: 21 人/38 人(参加率 55%)

内容:「普通の授業から考える(2)~「違う」ことからはじめる~」

- ① 美術:「デサイン入門講座」45 分模擬授業
- ② ビジネス実務:「会計実務演習」45分模擬授業
- ③ ビジネス実務:「社会人基礎知識演習」45分模擬授業

まとめ:他にどんな工夫ができるか?学生に問題が解けるのか?言葉の解説も必要となる。 また、答えが異なる場合、判断理由が必要となる。

意味が分からない場合も解く必要がある。どうしたら、正解に近づけるのか? 最後に時間が無くなる場合、テクニック編の解答を渡すことも検討する。 パターン化すると飽きてしまう→人数を少なくして競うことも効果的である。 実際に、学生といっしょに問題を作ってみる。カードを作って、いっしょに考える (プロセスをオープンにする)。先生が間違ってみる!

いろいろと授業の改善できるポイントを参加者全員で考えてみる機会となった。

アンケート結果 回答総数:14件

満足度数:大変満足10/14人(71%)、概ね満足4/14人(29%)

本研修で「得たこと」や「気づかされたこと」等について(抜粋)

- ・肩の力を抜いて学生とやりとりすることで楽しさが生まれる。
- ・雰囲気作り、問いかけの大切さが分かった。
- ・正解のある(決まっている)授業でもいろいろなやり方がある。
- ・教員自身が楽しんで授業を進めていくことが大切である。
- ・様々な授業のやり方を体験できて良かった。
- ・事前準備の大切さ、学生の立場(知識)を考えること。





3. 第1回「ファシリテーションスキル養成」教職員合同研修会

日 時:平成26年7月29日(火)及び7月30日(水)14:00~17:00

場 所:金城大学短期大学部 短期大学部棟A108 教室

講 師: 冨永 良史 氏 (発創デザイン研究室 代表)

(ファシリテーター/ワークショップデザイナー)

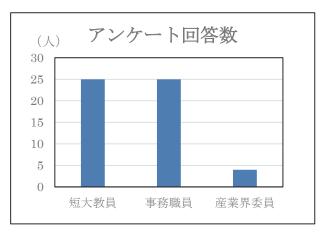
参加総数:68人(アンケート回収総数:54件)

内訳: 教員 32/37人(86%)、事務職員 32/47人(68%)、

「産学連携人材育成研究会」委員 4/24%人(17)

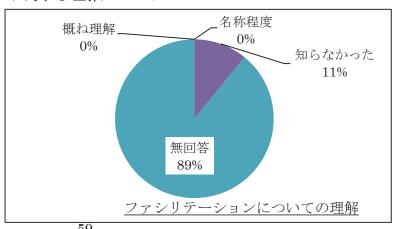
Q1. あなたの所属は?

短大教員	25 人
事務職員	25 人
産業界委員	4 人



Q2. 研修前のファシリテーションに対する理解について

十分に理解	0人
概ね理解	0人
名称程度	0人
知らなかった	6人
無回答	48 人



Q3. 研修で「得たこと」や「気づかされたこと」(抜粋)

- ・「ファシリテーション」は「スキル」ではなく「マインド」である。・・・7人
- ・他の学科が現在どんな方向性や考えでいるのかを聞くことができて良かった。・・・4人
- ・学校の組織のこと学生のこと、自分がどのように思っているかなど改めて気づいた。・・・3人
- ・感謝の気持ち、毎日楽しく過ごすこと、ひとに対して思いやりを持つことの大切さ。・・・3人
- ・自分と立場の違う方の考えかたの視点。・・・3人
- ・立場・役割の違う本学教員同士で"学生"について多いに語れたこと。・・・3人
- ・様々な意見を聞くニュートラルさ、柔らかさ。・・・3人
- ・学生に良い影響を与えるには、まず教職員が輝いていなければならないこと。・・・2人
- ・教職員のそれぞれの立場の意見を受けとり、多様な価値観に気付いた。・・・2人
- ・金城短大の「良さ」を再認識することができた。・・・2人
- ・金城のみなさんが真剣に取り組んでいることに気づかされた。・・・2人

Q4. 学生と教職員(同僚)同志とどのように関わっていけば良いか?(抜粋)

- ・積極的に学生に声をかけて関わっていきたい。・・・5人
- ・馴れ合い的な関係になるのではなく親しい中にも礼儀ありのけじめのある関わりをもつ。・・・4人
- ・金城のカラー(「芯」)を持って接していくべきではないか?・・・3人
- ・教育機関として教職員自身が社会人としての見本・手本となるよう関わっていく。・・・3人
- ・学生さんの立場になって考える。・・・2人
- ・教職員が協働して教育を考え、円滑な関係でないと学生の自立を促す教育はできない。・・・2人
- ・お互いの話をよく聞いて話す、行動する。・・・2人
- ・家族の一員と思って接すれば良い。・・・2人
- ・一人一人の個性を大切にする。・・・2人
- ・互いの立場を理解して関わって行くことが必要である。・・・2人

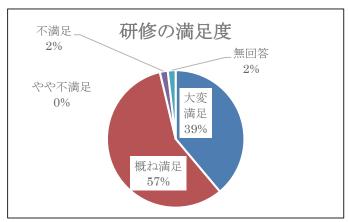
Q5. あなたの職場をどんなところにしたいのか? (抜粋)

- ・楽しく充実した職場。・・・3人
- ・風通しがよく、日々さわやかな職場。・・・2人
- ・活気ある職場。・・・2人
- ・明るく風通しの良い職場に。・・・2人
- ・笑顔で自分の意見をいい合える場。
- ・お互いに言わないといけないと思ったところは口にできるような職場。
- ・学生、教職員全員が夢に向かって充実した環境である場。
- ・学生が中心になって考え、支えていけるところ。
- ・学生が良い大学と思えるような職場。
- ・気持ち良く働くことができ、成長できる職場。
- ・教員、職員の別なく、自由に意見の交換ができる職場。
- ・教職員の関係が学生に良く関わっていける。
- ・交流の活発な学生主体となってものを考える職場。
- 様々な課題にメンバー全員で前向きに取り組める職場。
- 社会からみてうらやましく思えるような学園にしたい。
- ・上意下達ではない関係。
- ・セクショナリズムを感じない、全体が1つの部署(チーム)のように。
- ・全員がひとつの目標に向かって努力する。
- ・全教職員と全学生が自分の職場(学校)に自信を持ち、他に誇れるような職場にしたい。

- ・相互の理解を前向きに図る意欲のある職場。
- ・和やかだけどしつかりと働けるような雰囲気の良い職場。
- ・何事も前向きに取り組む職場。
- 働きやすい、話がしやすい職場。
- ・皆が同じではなく多様性があって良いが、意思疎通があり部署をこえて対話のある環境にしたい。
- ・みんなが意見・異見を出し合いながらコンセンサスを作り、リーダーの下にベクトルは同じ くして進んでいける職場。
- ・よい学生が育つため教職員が一体となれる。
- ・横のつながりを持ち、円滑に仕事が進むようにしたい。

Q6.「ご自身の参加した目的」や「期待」に対しての本研修の満足度

大変満足	21 人
概ね満足	31 人
やや不満足	0人
不満足	1人
無回答	1人



Q7. 研修全体の感想

- ・他の方の考えに気づかされることが多かった。・・・2人
- ・意識を変えることができた。
- ・異なる視点でのものの見方を体感できた。
- ・いろいろ対話ができて相手を知るいい機会だと思う。
- ・答えのないものに意見を出し合うのはとても難しく、満足感が得られにくいです。
- ・参加型の研修で、非常に充実した研修でした。
- ・自分の考えが固くなってきているということに気づくことができた。
- ・人や環境とのかかわりの大切さについて改めて感じた。
- ・就学、職場環境の向上につながっている。
- ・学生対応に自信が持てそうです。
- ・ちょっと視野が広まりました!すばらしい学校に来れてうれしいです。
- ・講師は結論を出そうとしないでも最後までそれぞれに考えさせて下さるのがすごい。
- ・有意義でした。

4. 研究部会の実施

開催日時:平成26年6月26日(木)13:00~14:30

内容:

この 2 年間のファシリテーションスキル養成研修のふり返りアンケート調査を行った結果 (抜粋)を以下に示す。ほとんどの教員が今後も同類の研修を定期的に実施していく必要性に ついて言及した。

(1)研修会のふり返り

- ・研修の回を増すごとに教員や職員間の距離も近くなり、会話も増え、和やかな雰囲気の中で学びができた。反面、和やかになり過ぎて、座談会で終わることもあり、一人ひとりが 意識を高めることを今後の課題とした。
- ・グループワークで語りあう場面においては3学科の特徴が分かり、それぞれの創造性・独 自性があり、関心度が増す研修となった。
- ・相手に伝えること、相手を理解すること、協働で考えることをシミュレーション体験できる研修は大切であった。しかし、得たことを具体的に実践できていないため、いかに今後につなげるかが課題である。
- (2)ファシリテーション研修会に関する要望や評価方法について
 - ①教職員合同研修会に対する要望・感想など
 - ・産業界と大学の共通課題が何かを掲げる。
 - ・社会へ巣立っていく学生に対して、教職員がサポートできる研修内容を検討する。
 - ・参加した達成感や満足度は強かったが、すぐ職場に活かせる研修を企画、検討する。
 - ②教員研修会に対する要望・感想・評価法など
 - ・チームで作る授業内容の見直しや新規導入に向けた検討を行いたい。
 - ・教員同士ではグループワークができるが、実際の授業ではうまくいかない。
 - ・何をすれば、学生にとって主体的な学習となるのか具体的な目標を検討したい。
 - ・数値で表せなくても、主観的な評価でもいいからアンケート調査を実施する。
 - ③その他の意見
 - ・産業界と大学の共通課題が何かを意見交換できる交流の機会を密にする。
 - ・学生と教員の交流を年間どれだけの時間が確保されているのかを見直す。

5. 平成 24 年度から 26 年度における 3 年間の取組について

(1)「ファシリテーションスキル養成」教員研修の企画

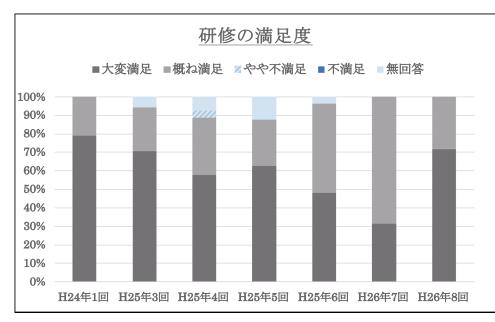
教員研修は、次の表 1 のように 6 時間研修を 8 回シリーズで企画した。まず、従来の授業をふり返り、背景にある授業観や学習観を知り、学生が学び合う授業の作り方をイメージした。次は、学生の参加型授業にするための工夫や教員の意識変革などについて意見交換し、最後にチームティーチングを行う新規科目におけるアクティブラーニング導入方法を企画し、各学科の教員による模擬授業を研修の中で実施することができた。

表 1「教員研修の概要」

回数	研修テーマと概要	ねらい
1回	◆学びあう授業のつくり方 1) 専門科目を魅力的な疑問文で表現する。 2) 自分の授業で何が起きているか。 ポジティブ/ネガティブな出来事に分類する。 3) 学生にとって良い授業とはどんな授業なのか。	・授業のふり返り・学生が学ぶとはどのような条件か。・また、どのような環境なのか。
2回	◆「これから」を描く1)研修で感じたこと、印象に残ったことは何か。2)ファシリテーションの研修上で疑問に思うこと。	・自分の到達目標をまとめてみる。
3回	 ◆GWを活性化するには? 1)情報カードをグループ毎に配付し、話し合いによって 地図を作成するワークや身体を使ったワークを体験する。 2)「ペーパータワー」ワーク 3)授業内にワークを取り入れた模擬授業を考え、実践する。 	・活気も学びもあるグループワーク はどのように生み出されるのか。・実体験しながら、いっしょに考える。
4回	 ◆授業をデザインする(1) 1)美術学科「キャリアセミナー」紹介 2)幼児教育学科「基礎教養」授業デザイン紹介 3)アクティブラーニング型授業に移行する課題を考える。 	・学生の目線から授業を見つめ直す。・「授業は学生のためにある」という点から、授業の再デザインをする。
5回	◆授業をデザインする(2) 1)幼児教育学科「基礎教養」からの問題提起 2)学生に身に付けさせたい力を考える。 3)複数の育むべき力を念頭に置いた模擬授業デザイン	・一人一人の学生が、「自分は、楽器や声を持っていて、それを鳴らしていいんだ、楽しんでいいんだ」と思える授業を創る。
6回	◆私が授業で実現したいこと 1) ビジネス実務学科1年「日本語表現」模擬授業 2) 幼児教育学科1年「基礎教養」模擬授業 3) 担当講師の授業をDVDで紹介	・何を願って、何を問いかける授業をするのか。・何を願い、何を問いかけてきたか。・何が起き、何が起きなかったのか。
7日	◆普通の授業から考える(1) 1)幼児教育学科1年「基礎教養」実践報告 2)美術学科「社会と美術論」実践報告 3)ビジネス実務学科1年「日本語表現」実践報告	ごく普通の授業のあり方をふり返り、どうすれば、さらに自然体な学びが生み出せるのかを考えてみる。
8回	◆普通の授業から考える(2) 1)美術:「デサイン入門講座」45分模擬授業 2)ビジネス実務:「会計実務演習」45分模擬授業 3)ビジネス実務:「社会人基礎知識演習」45分模擬授業	・他にどんな工夫ができるか。・意味が分からない場合、どうしたら正解に近づけるのか。

(2) 教員研修アンケート調査による考察

2 年間を通した教員研修の平均参加率はビジネス実務学科では 79.2%、3 学科全体では 60.5%となった。図 10 に研修の満足度調査の結果を示す。「大変満足した」と「概ね満足した」という感想を「満足した」と捉えると、毎回 85%以上が参加目的に適った研修が実施できていたことがうかがえる。次に表 2 のように 8 回目の研修を終えた時点で、1 回目受講後の感想と 8 回受けた後での感想を比較してみた。ここから興味深い意識の変化が読み取れる。最初は具体的なテクニックがほしいという意見が多くあったが、現在は、ファシリテーションスキルは単なるテクニックの習得ではないことを教員達が認識したといえる。



回数	参加人数
1回	19 人
3 回	17 人
4 回	26 人
5 回	16 人
6 回	27 人
7 回	16 人
8 回	14 人

※ただし、不満足の 回答数は全てゼロ。

図 10「教員研修の満足度調査結果」※2回目の研修はアンケート調査を実施しなかった。

表 2「8 回の研修を終えて」

	初回研修後	8 回研修後
意識したこと	・学生の気持ちを考えてみる。・回りの雰囲気をよくみる。・具体的な手法を教えてほしい。	・同じ授業でもクラスによってどのように展開が異なるのかに気づいた。・<u>間の取り方、話の手順、問いかけ</u>を 意識するようになった。
実践するようになったこと	・学生1人1人の反応に合わせた 授業を心掛ける。 ・授業の準備をしっかりとする。	 ・GWのマンネリ化にならないように 気をつけるようになった。 ・複数の教員で協働して授業作りを 行うようになった。 ・学科を越えて、模擬授業を体験する 研修を実施できるようになった。

(3)「ファシリテーションスキル養成」教職員合同研修の企画

教職員研修は、次の表3のように3時間研修を4回シリーズで半期に1回ペースで企画した。まず、できるだけ異なる部署や組織のメンバーを集め、コミュニケーションを取ることの重要性を学んだ。次は、同じ部署でも立場の異なる部下と上司の間で交わすコミュニケーションの中に、お互いの考えや価値観を受け入れる重要性などについて意見交換し、最後に自分の意見と相手の意見を如何にすり合わせて、受けとめて、共有させることができていけば、豊かな職場環境づくりへとつなげていくことができることを学ぶ研修を実施することができた。

表 3「教職員合同研修の概要」

回数	研修テーマと概要	ねらい
1 回	◆3人寄れば文珠の知恵は本当か?~有意義なコミュニケー	
H24. 2. 2	ションの基礎~	・1 人で考え、悩むよりも他者とコ
&	1) 3つの言葉で示す「自分」を自己紹介する。	ミュニケーションを取ることが
H24. 2. 27	2) 各テーブルでのメンバーの「共通点」は何か。	重要であること。
	3)3人集まってコミュニケーションを取る際、自分が(され	・コミュニケーションの中での行
	たら)嫌だと思うことは何か。	き違いも重要であること。
	4) 自分・他者の意見を参考にして、「コミュニケーションを	・「学び、あう」こと、他者とのや
	取る際、自分・他者が嫌な思いをしないために、自分がで	り取りの中にリズムを取ってい
	きることは何か。	くことが、場や雰囲気を作ってい
		< ∘
2 回	◆対話って何すること?~わからないこととの向きあい方~	
H25. 7. 4	1) 簡単な絵によるイメージの連鎖。	・自分が望む事/相手が望む事を
&	2) 伝言ゲーム(部下から上司へ報告)	共有しあう。
H25. 7. 8	3)価値の順位を考えてみる(愛情,名誉,健康,金銭,誠実,仕	・交わりにより驚きが生じ、お互い
	事)	が変化する。=「対話」
	4) 部下との接し方を考えてみる。	・お互いの考えや価値観を受け入
		れていかなければならない。
3 回	◆越境:対話する心身~凝ってませんか?~	
H26. 2. 21	1) 各人が用紙に自己紹介を記入し、互いに自己紹介する	・話し合える組織→持続して伸び
&	2) 仕事のやりがいって何?、辛いことって何?	ていく。
H26. 2. 26	3) 教職員インターシップで何を学べるのか。	・話し合える風土→具体的な戦略
	それによって、大学はどう変わるのか。	・『越境』→外を体験してしなやか
	実行するための課題を考えてみる。	さを身につける。
4 回	◆組織風土を育む〜金城短大って、どんなところ?〜	
H26. 7. 29	1)職場で喜びを感じる時はどんな時か。	『組織=金城短大』
&	2)職場で感謝の気持ちが浮かぶ時はどんな時か。	『私』にとってどんなところか。
H26. 7. 30	3) 学生は、本学に何を求めて入学してきているか。	・『学生』にとってどんなところか
	4) 学生は、入学後、本学に何を感じているか。	を話し合う。
	5) 自分自身が学生の時、どのように感じていたか。	・『地域』にとってどんなところか
	6) 教職員はどのように接していけば良いのか。	を話し合う。

(4) 教職員合同研修のアンケートより、研修全体の感想について

この3年間の研修を通し、いろいろな考え、立場の方と意見交換することで自分が望むことや相手が望んでいることを共有する研修が実施できたと思う。4回目の研修を終えた参加者のアンケート結果(抜粋)を次に示す。

- ・他の方の考えに気づかされることが多かった。・・・2人
- ・異なる視点でのものの見方を体感できた。・・・2人
- ・参加型の研修で、非常に充実した研修だった。
- ・自分の考えが固くなってきているということに気づくことができた。
- ・人や環境との関わりの大切さについて改めて感じた。
- ・就学、職場環境の向上につながっている。
- ・もう少し実践的な(掘り下げた)研修ができる時間がとれると良い。

(2)「教職員インターンシップ」による教育改革力の向上

「教職員インターンシップ」部会 部会長 加藤 博

事業内容

教職員インターンシップは、「学生の社会的・職業的自立力育成を目指して教職員がおこなう職場体験」であり、本学独自の取組である。学生がおこなう一般的なインターンシップ(就業体験)とは異なり、とにかく産業界の様々な職場へ行き、若者が活躍する生の現場に触れることを通して、学び取ったものを今後の教育や学生指導に生かすことを狙いとして活動している。

平成 26 年度取組実績

これまでの教職員インターンシップとしての実績をもとに、各学科から提案された研修先の業種・ 職種について部会に持ち込み、受け入れ先について検討した。学科の特性に応じたことで、産業界 からのニーズをより詳細に把握し、そのことを学生にフィードバックできることを目指した。

また、学生のインターンシップと同様に産業界との連携がとれるよう受け入れ先からの所見願いを作成し、これと教職員のインターンシップ報告書と合わせることで相互の理解につなげ、それをもとに学生の就職支援に生かしていけるよう整備した。

■教職員インターンシップ

- 1. 研修等参加インターンシップ実施について
 - ①9/10 保育園

「保育内容研究会 公開保育」視察 参加者:幼児教育学科教員 2人

②11/7 金融業

「3年目職員フォロー研修コメンテータ」視察 参加者:ビジネス実務学科教員 2人

③11/14 金融業

「2年目職員フォロー研修コメンテータ」視察 参加者:事務職員 2人

- 2. 現場体験インターンシップ実施について
 - ①9/17 医療施設

参加者:ビジネス実務学科教員 2人、

事務職員 1人

②9/18 菓子製造業

参加者:美術学科教員 1人

③9/24 印刷業

参加者:美術学科教員 1人

④10/21 印刷業

参加者:美術学科教員 1人





■成果

今年度の教職員インターンシップについては、部会が企画した提案に対して教職員に依頼する 方法でなく、これまでの実績をもとに部会員が各学科会議で教職員インターンシップについて提 案し、業種・職種についての具体的な要望を部会の会議に持ち込み、受け入れ先を検討し研修先 を決めていった。

その結果、5 社と 1 保育園の合計 6 ヶ所で実施することとなり、そこには学科や就職進学支援 部の要望で新規の企業も加わり、教職員が目標を持ち研修に取り組めるようにした。

今年度では、3 学科及び事務職員が教職員インターンシップを行うことができ、今後ともこの 現場から得たニーズをより詳細に学生の就職指導へと生かせるよう努めていきたい。

平成 24 年度~26 年度取組総括と今後

平成22年度よりビジネス実務学科で始めた教職員インターンシップを、今回の事業の中で美術学科と幼児教育学科を含めた3学科と事務職員まで含めて対象とし、他に類を見ない教職員インターンシップとして取り組みながら実績を重ねてきた。内容も研修等参加と現場体験という2分類を設定し、産業界からの協力を得られやすいようにした。

また、各学科の特性に合わせた研修をより具体的に学生指導に生かせるよう企画したことから、 各学科からの教員の協力を得られた。さらに、事務職員も研修に参加することで、産業界が求め る人材の資質や能力、採用に関することなど直接現場から情報を得ることができた。

他にも「ファシリテーションスキル養成」部会の協力を得て、教職員インターンシップを題材とした研修会も開催し、本学教職員と産業界委員から多くの意見を交換することで、研修への意識向上につなげることができた。

今後については、これまでの実績をもとに産業界とのつながりを維持し、教職員が現場のニーズを把握できる機会を設け、学生の就業支援に役立てていくためにもこの事業を継続していくことが大切である。

そこで、研修に参加した教職員から改善点を含め教職員インターンシップを継続するための意 見を求め、今後のあり方を考察することにした。

■教職員インターンシップのアンケートについて

この研修に参加した教職員は24人であり、インターンシップの現場については報告書で記されているものの、研修から時間が経過していく中でどのようなことを学生にフィードバックされたかなど調査するため、平成26年12月中旬~平成27年1月上旬に実施し意見を求めた。アンケートの質問事項については、部会で協議し修正したものを配布した。

1. 教職員インターンシップに参加してどのような気づきがあったか。

- ・結婚式場での体験でした。企業として、その季節や流行などを一早く取り入れ、式の有無により労働者をフレキシブルに配置できるよう効率化を追及し、短いスパンで結果の求められる仕事だと感じた。
- ・半日説明を聞くだけでは、そこまでの気づきはなかった。あえていえば、同業種でも企業に よって、雰囲気がかなり違うということ。
- ・人事担当者が学生達を見ているポイント。(面接やディスカッションに参加させていただい た時)
- ・子どもを観察することの重要性。自発性を育成する前提条件である。
- ・入社 2 年目、3 年目といった年度別に計画的に社員教育がなされていることを目の当たりににし、社員教育は人間力向上につながっていると感じた。
- ・いずれの業界においても、新入社員をその企業の仕事をできる「一人前の人間」にするため の必死の取組をしている。
- ・各企業等の個性、こだわりというものが伝わってきた。(担当いただいた方)
- ・仕事内容だけでなく、職場の雰囲気や必要な熟練度までよく理解できるので、生きた情報源 となった。
- ・現場の保育士が仕事と平行して熱心に学んでいたこと。
- ・自身で感じていたことが裏付けされた事。自分で考え問題を解決していく力、現場で必要な 技術、おきまり体裁、そういったものの体世憂さ。改めてお話を聞くことができ、産業界の ニーズとして自身をもって学生にフィードバックできた。
- ・製造業だと思っていたところ、基本的にはサービス業であると言われて、自分の先入観であったことを認識することになった。
- ・やる気と次回につながるような仕事をすること。「仕事は楽しく面白く」を忘れずに自分仕様 に考えて、よりよい業務を行うこと。
- ・社内研修を見学して本学卒業生の活躍している様子を確認できた。同様な研修は本学でも重要であると再認識した。
- ・医療や栄養など国家資格保持者である専門スタッフで成り立つ病院という組織において、事 務職として仕事をするならば、まず、事務職としてのプロ意識が求められるのではないか。
- ・毎日忙しい保育現場の先生方が、勤務外に研究会のための打ち合わせや研修会を開いて勉強 会を実施し、研究会にも多くの先生方の参加が見られたこと。
- ・全社員が同一方向へ向いて仕事をしているのがすばらしかった。
- ・大学における教育と企業における教育の違い。具体的に企業における教育は良くも悪くも目標と結果がはっきりしている。
- ・参加した企業の様子が、想像していたものと大きく違う点。例えば、製造系の会社でも、会 社説明会の様子は、想像以上に面白い内容だったことなど。
- ・能力よりも人柄を重視している印象を受けた。採用試験だけでは人間性は分らないため、長い間勤められる人材をさがしている印象がある。

2. 教職員インターンシップの成果が、どのように学生支援・指導に生かされたか。

- ・企業に対して学生の向き不向きを確認するポイントなど、企業選択のポイントについてのア ドバイスには役立ったかもしれない。
- ・キャリアセミナー担当として、印刷工程や会社によっての違いがとてもあるなど、時間を持って伝えられた。
- ・参加させていただいた企業への理解が深まったため、それらの企業を受けたいと思っている 学生へ、面接のポイントや入社してからの社員研修の様子など具体的アドバイスすることが できた。
- ・具体的な事例を紹介することができる。
- ・情報・知識において、自ら得ていることが相手に安心感を与えていること、自らが信じることができるようになった。
- ・就職指導のための個人面談で現実を知らせる。
- ・就職支援の立場では、様々な業界、職場について学生に詳しくアドバイスが可能となる。(と思われる。)
- ・社員研修に参加することで、その企業のレベルや求められる具体的な資質がよく理解でき、 就活のアドバイスができるようになった。
- ・学生に対し、生涯学習の必要性を伝えた。
- ・演習授業の方法を見直した。課題の提出を企業に対して行うようなプレゼンシート形式にし、 体裁の大切さを取り入れた。また、すぐに解答に至ることなく、調べる→失敗する→調べる を体感できる(くせにする)工夫を行うようになった。
- ・その頃、同じような職種を受ける学生がいたので、その仕事や内容やその厳しさについて話 をすることができた。
- ・参加した企業ではどういった業務を行っているか、具体的に伝えることができる。
- ・修飾語も常に学ぶ姿勢が必要であることを学生に意識させながら進路支援に生かすようにしている。
- ・夏季休暇中に、内定先の個人病院で研修を受けた学生の中には、医療スタッフとともに仕事をすることの難しさや、仕事内容の高度さから、内定を辞退したことも見られた。学生のこの事態について、「起こりえることであった」のではないかと今では理解できる。病院での仕事を希望する学生には、「高い専門性を持つ医療スタッフを中心に構成されている病院という組織」で働くための意識付けが必要なのではないかと考え、病院で仕事をする心構えがあるか、確認しながら支援していきたい。
- ・保育現場の先生方との意見交換の場で、学生の学びを深めてほしいと同時に現場でも引き続き、若手の保育者の指導をしていく現状がある。つまり、現場に対する就職の不安を軽減し、 安心して現場で働くことができる体制を紹介できた。
- ・学生に本学がどのような人間になってほしいかを示し、具体的目標を持たせる工夫ができる ようにする。
- ・大学におけるキャリア教育は、実践的な実務教育を中心にするのではなく、人間教育を中心

にするという意識をもって支援に当たった。

- ・「企業は訪問してみなければわからない」「聞いたことがない企業・業種でも、とてつもなく 活気あふれるところがある」「企業側が見る学生」といったことを伝えることができた。
- ・具体的に企業が求める人材について、現在の学生が抱えている問題を知ることが出来たので、授業に反映できそうである。

3. 今後どのような教職員インターンシップに参加したいと考えるか。

- ・ 金沢芸術創造財団など、美術の活動を街の企業や団体と協力して、地域の活性化に仕掛ける ことに携わる業種。
- ・ゲーム、アミューズメント関連。(DMM. com/リュウテック/マイレ4/A. I/グラレゼーラ等)
- ・学生から人気の職種(医療事務、事務、ブライダル、金融)など。企業説明会、面接、社員教育等に参加させていただけた教職員インターンシップでは得るものが大きかった。
- ・幼児教育に関連する内容・受け入れ先であれば 0. K.。
- ・どことはいわず、学生が就職しているもしくは就職を希望している所であればどこでも。
- ・教員も含め就職支援を目的の中心とすればよいと思うので、幅広く、継続的に行うのがよい。 具体的にはないが気になるところから順に行けばよいかと…。
- ・毎回異なる業種の職場 or 研修体験をしてみたい。人事担当者がどのような学生、能力を求められているのか分かるような体験がしてみたい。例えば、企業説明会や採用試験の立会いなど。
- ・自分の専門分野ではない、業種の魅力を知り、一般職への道を探る学生への助けになりたい。
- ・雑貨やなど学生の希望が多い職種について詳しく現場をみてみたいと思う。
- ・学生の希望職種や卒業生の就職先で、実際の業務見学や話を聞く内容で実施できると良い。 就職担当者以外でも業務について色々と話を聞くことができるので、これまでの業務を振り 返り、これからに生かすことができる。
- ・本学の卒業生が実際に働く場面に密着して体験できるような研修が可能であれば良い。
- 公立松任石川中央病院。
- ・保育現場における保護者との関わりを学べる行事への参加。
- ・実務を体験するような本当のインターンシップが理想。
- 人材派遣会社等。
- ・学生の就職先や、学生のインターンシップでお世話になっている企業に参加できればよい。
- ・時間は短くても良いと思うので、多くの業種・企業を周り、必要な人材をリサーチすること。 それに合わせた学生とマッチングさせることをする。

- 4. 「教職員インターンシップ」の名称について、次年度以降、研修内容をよりわかりやすく表現する案はあるか。
 - ・変更の必要を感じない。
 - ・実体にあっていないと思うが、対外的にはインターンシップの名前を残したほうがアピール になると思います、内容を検討し、名称は残すのがいいと思う。
 - •「業界研究視察」「業界研究訪問」「教職員業界研究視察」「教職員業界研究訪問」「職場研究視察」「職場研究訪問」「教職員職場研究訪問」。
 - 就職サポートのための「教職員インターンシップ」。
 - ・学生支援のための「教職員インターンシップ」。
 - ・社会に貢献できる人材育成のための「教職員インターンシップ」。
 - ・教職員向けのインターンシップ研修。
 - ・現場参加、合同研修というニュアンスの言葉がふさわしいいのではないか。
 - ・「産業界ニーズ伺い隊」「教職員企業キャラバン」「教職員企業勉強会」※とにかく親しみやすい感じ。企業側の要望を引き出しやすい語呂。
 - ・産業界委員から変更しなくても名称で内容やわかりやすいのでそのままでいいのではないか。
 - 教職員の産業界企業研修。
 - 産業界視察研修。
 - ・職業現場訪問(体験)型プロジェクト。
 - ・実際の仕事に携わらないので「インターンシップ」というのは不適当かもしれない。単なる「企業研修」で良いかもしれない。但し、大手の企業でも学生インターンシップの特別メニューを作っているところもり、これで良いかも。
 - 教職員遊学研修。
 - ・逆に、「教職員インターンシップ」という名称は、大変なインパクトがあるように思われる。 (中部ブロックのポスターセッションで最も多く訊かれたり、驚かれたりした)

5. 教職員インターンシップ部会に対する要望

- ・ 先方の負担もあるので、むずかしいと思いますが、実際に仕事をやるところまでしてもいい のではないか。(今は話を聞いて終わりなので見学しかしていない)
- ・非常に良い取組だと思うので、一部の教職員だけでなく、より多くの方に参加いただけるようにしていければ良いと思う。
- ・お互いのインターンシップ体験の意見交換する機会があれば良いと思う。
- ・幼教とそれ以外の学科はまるで事情が違うのに、同じように動いていることに不自然さを感 じる。
- ・幅広い職種や規模の受入れ先があると良いかもしれない。たとえば個人デザイナーやカメラマン等、自活の道も将来的に考える学生のための勉強の機会になるかもしれない。
- ・今年度の取組計画は、3 学科の意見を取り入れることができ良かったと思うが、実施にあた

- り、実施の目的をもう少し明確に説明した方がいいかもしれない。
- ・もう少し機会が増えれば参加者も増えると思う。
- よい取組だと思う。

〇取組のまとめ

今回のアンケートについては、この教職員インターンシップの取組を継続するにあたり、多くの意見が寄せられた。概ね、今後続けて取組むことに関しては良い機会であり、そこでの経験が視野を広げ、学生指導に生かせるもととなったようだ。しかし、維持していくにあたり細かなところでの配慮と、改善していかなくてはならない点も多くあった。教職員に対して研修前に教職員インターンシップの主旨を説明し、コンセプトを明確にすることについては、産業界委員との部会でも指摘されていた。

学生と教職員と産業界を結ぶこの取組については、この3年間でも12社に及ぶ企業や施設などのご協力をいただき、更に連携を継続しつつパイプを太くしていく必要がある。地域社会の担い手となる人材を育成するために、教職員が産業界のニーズを把握し現場の情報収集に努める機会とし、今後も学生の就業支援に生かしながら教育力向上につなげていきたい。

○今後の課題

- ①教職員インターンシップの研修について
 - ・研修実施企業の開拓 各学科からの提案を検討し、受け入れ先企業を拡大するため依頼活動をする。 就職進学支援室やハローワークなどから、多様な業種・職種を開拓する。
 - ・研修参加者の実施報告書の共有 実施報告書については、産業界の現場の様子や実情を学ぶ上で参考となるため、共有できる ことを目指す。
 - ・研修の事前、事後会合について 研修前の教職員には、このインターンシップの目的についての説明会を行い、研修内容の 確認や質問等に対応し、研修後には情報交換会として互いに得たものを共有する。

②年間計画について

- ・企業や保育関係の研修時期を把握し、年間計画をなるべく早めに提案する。
- ・教職員の活動しやすい期間(9月頃)として計画するが、各学科や教員の都合も考慮する。

③名称について

・「インターンシップ」という名称を取入れた教職員研修として外部に対しても認識されやすい ことから、今後も内容を検討しつつ継続していく。

(3)「親学通信」「保護者サロン」の活用による保護者の教育力向上への支援

「保護者の教育力支援」部会 部会長 井戸 健敬

事業内容

地元で進学する短期大学生にとって、保護者の日常的な支援も大きな力となるが、保護者は、 我が子に適切な助言をするための情報を得る機会が少ない。これに対応するためにビジネス実務 学科において取り組んだ実績を全学に発展させ、保護者への定期的な情報提供と上ブサイトによ る常時交流を行い、保護者の教育力向上への支援を行う。

平成 26 年度取組実績

本部会では保護者への情報提供を目的として「キャリア親学通信 2014」の発行と「保護者サロン」の運営による情報発信を行った。以下、それぞれの取組について述べる。

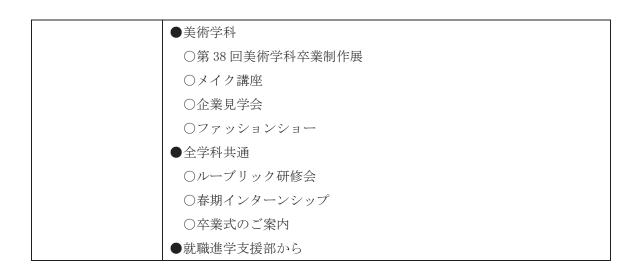
1. 「キャリア親学通信 2014」

キャリア親学通信は、当初ビジネス実務学科のみを対象として、学科の活動や就職活動に関する情報を保護者に対して発信してきた。これを平成24度後半からは全学科対象とし、平成25年度より名称を「キャリア親学通信2013」のように年度を含めたものとした。今年度1年間で4号を発行し、各号の内容は下表に示す通りである。

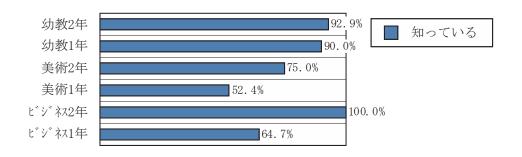
キャリア親学通信 2014 の内容

●学長あいさつ
●ビジネス実務学科
○夏期インターンシップ
○ゼミナール(中間発表会)
●幼児教育学科
○「フォローアップ講座」
○保育実習
●美術学科
○「基礎演習」
○「イタリア研修旅行」
●全学科共通
○「ファシリテーションスキル養成講座」
○教職員インターンシップ
○保護者サロン
○保護者懇談会のお知らせ
●就職進学支援部から
●美術学科アートショップ開店!
●ビジネス実務学科

H26. 10. 16 発行	○「初年次教育学会」全国大会で本学の教育実践を発表!!
	○インターンシップ報告会
	●幼児教育学科
	 ○幼児教育学科教員研修会
	○模擬面接会
	○実習報告会
	●美術学科
	○東京アート研修プログラム
	○『アカデミア金城14展+研究生展』のご案内
	●全学科共通
	○「ファシリテーションスキル養成講座」教員研修会報告
	○教職員インターンシップ
	OAL サロン
	○学園祭のお知らせ
	●就職進学支援部から
第3号	●連携 FD 紹介
	●ビジネス実務学科
H26. 12. 25 発行	○学生プレゼンコンテストに2名が参加
	○春期インターンシップ
	●幼児教育学科
	○ミュージックフェスティバル"Kinjo Waku Waku World"
	○保育実習前講演会
	●美術学科
	○受賞者一覧
	○金城アートショップ、無事終了!
	●全学科共通
	○「ファシリテーションスキル養成講座」
	○教職員インターンシップ
	○保護者サロン
	●就職進学支援部から
第4号	●学長あいさつ
	●ビジネス実務学科
H27.3.3 発行	○金城ビジネス学会
	○リーダー研修会
	○ゼミナール
	●幼児教育学科
	○特化成果発表会
	○リーダー研修会



今年度は8月の保護者懇談会の際に、保護者が「キャリア親学通信」をどの程度読んでいるか聞取調査を行った。調査結果を下のグラフに示す。いずれの学科においても、1年生より2年生の保護者の方が読んでいる率が高いことが分かった。これは、各号における就職進学支援部からの就職活動に関する情報が有益なためと考えられる。一方で、保護者会に参加する比較的学生への関心が高いとされる親でさえも「知らない」と回答する人がいることは大きな課題といえる。



2. 「保護者サロン」

「保護者サロン」は前回の「大学生の就業力育成支援事業」の際に立ち上げた Web サイトである。平成24年度の「産業界ニーズGP」への移行を受けて昨年度より幼児教育学科と美術学科を加えて3学科で利用できるよう改良した。また、ブログの閲覧制限をなくし、手間なく閲覧できるよう完全公開とした。

次頁に月別の保護者サロン利用状況を示す。アクセス数は年々増加していることがわかる。特に一昨年度から昨年度にかけては、利用学科の増加とブログ投稿の活発化により大幅なアクセス 数増加が見られた。

ブログは、一昨年度から昨年度にかけて大幅に投稿数を増やした。(ただし、昨年度にブログデータをリセットしたため、一昨年度のデータはない。)特に昨年度前期は毎日書込むことを目標としたため、土曜日も含めて多くの投稿があった。しかし、昨年度後期から今年度については、「とにかく毎日」ではなく、行事等に合わせて投稿することとしたため、ブログ投稿数は減少している。また、学科別の投稿数は昨年度、今年度ともにビジネス実務学科が最も多い。これはビジネス実務学科が他学科に比べ、身軽に投稿できる教員が多いことが考えられる。

最後に、個別相談コーナーへの問い合わせ数について記す。同コーナーの利用率は例年低く、3 年間の合計でも9件にとどまる。相談の内訳は、単位取得や就職活動についてで、いずれも担任 教員が対応した。

保護者サロンの利用状況(月別)

月	アクセス数			ブログ		個別相談	
	Н. 24	Н. 25	Н. 26	Н. 25	Н. 26	Н. 25	Н. 26
4	138	395	503	28	15	0	1
5	46	249	241	25	6	2	0
6	51	172	214	25	13	2	0
7	58	158	176	25	7	0	1
8	25	113	136	10	5	0	0
9	28	109	92	13	4	0	0
10	17	150	156	17	4	0	0
11	39	142	94	11	4	0	0
12	24	116	107	9	3	0	0
1	41	101	124	8	1	0	0
2	43	104	90	8	5	0	
3	69	109		4		0	
合計	579	1, 918	1, 933	183	67	4	2

ブログ投稿数 (学科別)

	Н. 25	Н. 26	合計		
ビジネス実務学科	67	40	107		
美術学科	20	11	31		
幼児教育学科	15	5	20		
学科共通	81	11	92		
合計	183	67	250		

個別相談問い合わせ件数 (学科別)

	Н. 24	Н. 25	Н. 26	合計
ビジネス実務学科	3	3	0	6
美術学科	_	1	0	1
幼児教育学科		0	2	2
合計	3	4	2	9

※本ページのデータは平成27年2月20日現在のものである。

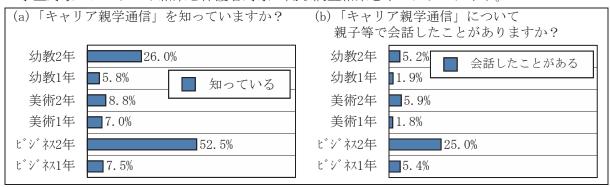
平成 24 年度~26 年度取組総括と今後

3年間を通して「キャリア親学通信」の発行と、インターネット交流サイト「保護者サロン」の 運営を行ってきた。以下、それぞれについて記す。

1. キャリア親学通信

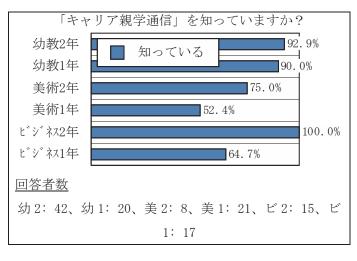
「キャリア親学通信」は、就職活動環境の現状や、学生は今何をする時期なのか、保護者の支援はどのようなことが必要なのか、などの情報を定期的に発信してきた。A4 サイズ 4 ページ構成を基本とし、平成 24 年度は 2 号、平成 25 年度は 5 号、平成 26 年度は 4 号を発行した。保護者へは郵送しており、本学からの一方通行の情報提供となっている。このため、どの程度保護者の目に触れ、どの程度の効果があるのか、ということが見えにくい。同通信の保護者への効果を測るため、学生を対象としたアンケート調査と、保護者を対象とした聞取調査を 3 学科で実施した。学生へのアンケートは平成 26 年度前期終了時、保護者への聞取調査は、同 8 月の保護者懇談会の際に行った。

学生対象のアンケート結果と保護者対象の聞取調査結果を下のグラフに示す。



学生対象のアンケートの設問は、「キャリア親学通信を知っているか?」と「キャリア親学通信について親子等で会話したことがあるか?」の2項目とした。グラフより、あまり家庭で話題に上がることもないのか、自分の親は知っているとする回答は少なかった。学科別に見ると、「知っている」と「会話したことがある」の率は、ビジネス実務学科が最も多く、他学科に比べて関心が高いことがうかがえる。

保護者対象の聞取調査では、個人面談時に「キャリア親学通信」を見せて、どの程度読まれているのかを調査した。右のグラフより、「知っている」の回答が多く、学生が思っているより関心が高いことを示している。また、いずれの学科においても、1年生より2年生の保護者の方が読んでいる率が高いことが分かった。これは、各号における就職進学支援部からの就職活動に関する情報が有益なためと考えられる。一方で、保護者会に



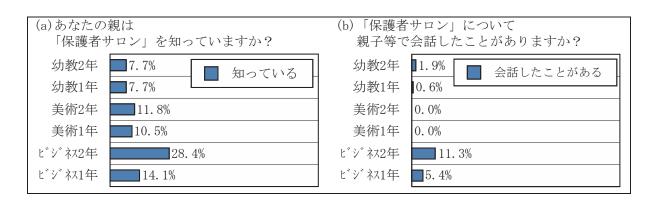
参加する比較的学生への関心が高いとされる親でさえも「知らない」と回答する人がいることは

大きな課題といえる。

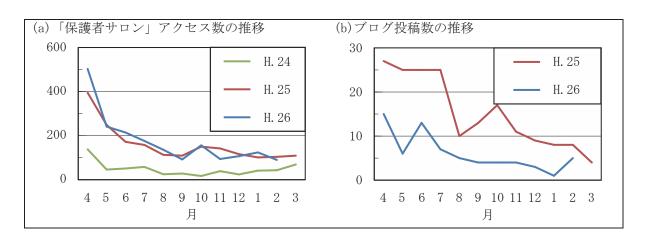
2. 保護者サロン

「保護者サロン」は、インターネットを利用したサービスである。学内におけるトピックスを ブログで紹介したり、個別相談を受けたりするもので、入学時の保護者説明会で URL を案内して きた。

「保護者サロン」についても学生を対象にアンケート調査を行った。ただし、保護者に対しての聞取調査は行わず、サーバーのアクセスログから利用状況を解析した。アンケート結果を下のグラフに示す。「キャリア親学通信」以上に「親は知っている」と思っている学生は少なかった。また、ブログコーナーは、親子の会話を促すことを目的として運営しているが、「会話したことがある」という回答は、ビジネス実務学科と幼児教育学科の少数のみであった。



次に、平成24年から平成26年までの3年間における「保護者サロン」のサーバーログからのアクセス数とブログ投稿数の推移を下のグラフに示す。ただし、平成25年度のリニューアル時にブログをリセットしたため平成24年度のデータはないが、実際には、平成24年度も月に1件程度の投稿があった。アクセス数の推移は、毎年4月が最大で、月を追う毎に減少するという傾向が見られる。また、平成25年度と平成26年度では、ブログ投稿数に大きな差があるにもかかわらず、アクセス数の差はあまり大きくないことがわかる。「保護者サロン」の情報は学内行事が多く、主に入学直後の1年生の保護者が関心を持つ内容が多いためと推察できる。このため、ある程度学内の様子がわかれば、日々チェックする必要もなく、気が向いたときに少し覗いてみるという程度のアクセスであることがうかがえる。



以上のデータから、多くの保護者に対してキャリアデザイン教育について浸透させることができたとは言い難いが、学科の保護者には関心を持ってもらえたと考えられる。しかし、より多くの保護者が関心を抱くにようになるにはさらなる工夫が必要である。





Ⅳ。「産学連携人材育成研究会」の概要

平成24年度に本取組を申請するにあたり、石川県中小企業家同友会、白山市経済団体連絡協議会、白山市、石川県社会福祉協議会、いしかわ子育て支援財団、賛助企業・機関という5公共機関と1賛助企業グループの賛同を得て、学内に「産学連携人材育成研究会」を設置した。

本学は、地域に根ざした高等教育機関として、それまでも各公共機関等と連携はしていたが、 このように石川県を代表する公共機関や地元有力企業等から支援を得て、若者の人材育成に対し て、組織的に産学連携活動を行うことは、大きな飛躍であると考える。

1. 研究会の構成:

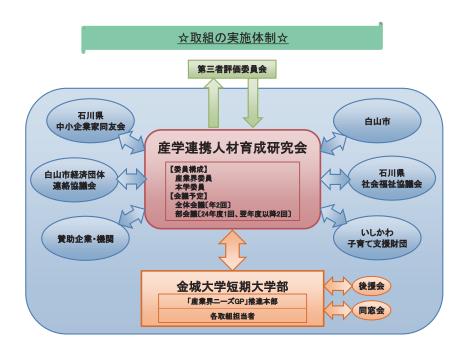
研究会の人員構成は、次のとおりである。

- (1)研究会委員(計41人)
 - ①産業界委員(25人)
 - [内訳]·石川県中小企業家同友会(7人) ·白山市経済団体連絡協議会(5人)
 - ・ 賛助企業・機関(6人) ・ 白山市(2人) ・ 石川県社会福祉協議会(3人)
 - ・いしかわ子育て支援財団(2人)
 - ②本学推進本部委員(16人)

[内訳] 本部長・副本部長・学科長・部会長・担当職員

- (2)第三者評価委員(4人)
 - [内訳]・石川県中小企業家同友会前代表理事
- · 白山市商工会議所専務理事
- · 石川県社会福祉協議会専務理事
- 白山市企画財政部企画課長

また、研究会の実施体制については、下図のとおりである。



2. 研究会「全体会議」の開催等:

(1) 平成 24 年度

①第1回全体会議

日 時: 平成24年12月4日(火) 13:00~14:30

場 所:金城大学医療健康学部棟 H207 教室

出席者: 産学連携人材育成研究会委員 22 人、第三者評価委員 3 人、金城大学短期大学部

担当者 17人

◆意見交換より抜粋

- ・産業界では、「自ら考え行動する力」や「コミュニケーション能力」の不足を感じており、 この会議で討議されることを希望する。
- ・即戦力となる人材、自ら考える力、コミュニケーション能力の高い学生の育成が改めて必要と考える。先生方にも社会の現場の厳しさを体感してもらうことも必要。今後、各部会で様々な意見を出してもらい、実のある会議にしていただきたい。

②第2回全体会議

日 時:平成25年3月22日(金) 15:00~16:30

場 所: 金城大学医療健康学部棟 H206 教室

出席者:産学連携人材育成研究会委員16人、金城大学短期大学部担当者14人

◆意見交換より抜粋

- ・「保護者の教育力向上への支援」部会に所属しており、今回初めて幼児教育学科と美術学科の先生と話す機会を得た。学科ごとの垣根をなくし、全学的に保護者への情報発信や学生とのコミュケーションがとれるよう取り組んではどうか。保護者向けのものは「一般的」なものが多く、興味のあるものしか読まない。保護者だけでなく学生と共に作っていく親学通信、保護者サロンに取り組むことを提案する。
- ・学生のインターンシップ受け入れをしていないため、実際に学生と接する機会がなく、 実状はあまり把握していない。学生が社会に出て、適応できるようになるためには、 経験を学生時代にたくさん積んだ方がよい。自分自身がどのような支援ができるかに ついては、今後検討していく。
- ・「ファシリテーションスキル研修会」に2回参加した。自分自身が「ファシリテーション」という言葉を理解していない状態での参加であり、しかも、学外の人間は2人だけであったが、どんどん打ち解けていき、自分の中に起こった変化自体が「ファシリテーションなのか」という体験をした。平成25年度以降も積極的な参加や協力をしていきたい。

(2) 平成 25 年度

①第1回全体会議

日 時: 平成25年9月19日(木) 14:00~15:30

場 所:金城大学医療健康学部棟 H211 教室

出席者: 産学連携人材育成研究会委員 20 人、金城大学短期大学部担当者 16 人

- ◆意見交換より抜粋
- ・教職員インターンシップに協力する。本学卒業生と一緒に研修してもらう。
- 「保護者サロン」のブログ内容に就職活動についての報告を盛り込んではどうか。
- ・今後のエビデンス(証拠)作りが課題である。

②第2回全体会議

日 時:平成26年3月6日(木) 15:00~16:30

場 所:金城大学医療健康学部 H211 教室

出席者: 産学連携人材育成研究会委員 10 人、金城大学短期大学部担当者 14 人

◆意見交換より抜粋

- ・「教職員インターンシップ」実施について、当研究会委員の企業・団体すべてに協力していただき、参加企業数を増やしたらどうか。そのためには、短時間の研修も検討してはどうか。
- ・「教職員インターンシップ」参加先は、本人にとって関心のない場などにあえて赴き、 異体験をすることも必要ではないか。
- ・学生のインターンシップ参加方法について見直しをしてみてはどうか。
- ・所属部会だけでなく、他の部会でしていることにもぜひ参加してみたい。

③特別講演会

日 時:平成26年3月6日(木) 13:30~14:50

場 所:金城大学医療健康学部棟 H206 教室

講 師:株式会社リアセックキャリア総合研究所所長 株式会社大学改革 代表取締役 角方 正幸 氏(産業界ニーズ GP「中部圏ブロック」アドバイザリーボード委員)

演 題:「産学連携の人材育成について」

出席者:計34人(産業界委員6人、教員23人、職員4人、その他1人)

- ◆アンケートより抜粋
- ・キャリア教育や就業力育成について理解することができた。
- ・アクティブラーニング、ファシリテーションスキル、キャリア教育など、これまで取り組んできた取組の重要性を客観的に見ることができ、必要性を改めて感じた。
- ・改革への課題を具体的にどう推進していくか、大学と産業界との連携が必要と感じた。
- このプロジェクトの役割がとてもわかりやすかった。
- ・GP やアクティブラーニング、インターンシップを多く取り入れるようになった経緯がよくわかった。その結論のひとつとしてインターンシップに行き着いたが、インターンシップ内容の充実や有効性についての検証が必要だと思う。

(3) 平成 26 年度

①第1回全体会議

日 時:平成26年11月4日(火) 13:30~15:00

場 所:金城大学医療健康学部棟 H207 教室

出席者: 産学連携人材育成研究会委員 16 人、第三者評価委員他 5 人、金城大学短期大学部担当者 18 人

◆意見交換より抜粋

- ・採用側として、学生に在学中の経験に関する質問をするが、それに対してアルバイト の経験談がほとんどで、勉学に関する経験談が非常に少ない。学生には、大学で何を 学んできたかをもっとアピールして欲しい。
- ・子育て支援の一環として「婚活」にも関わっているが、参加者はコミュニケーション が上手にとれないようで、男性同士で話をする場面も見受けられる。インターンシッ プのように体験学習の機会が増えることが望ましい。
- ・ファシリテーションスキル研修会に参加し、研修会を行うごとに教職員のつながりが 強くなっていると感じた。今後続けられるかが大きな課題である。期待している。
- ・医療業界では資格取得が重要となる。様々な場面で学生の発表を聞くたびに、学生へ の支援をもっとできないかと考えている。
- ・保育現場では、即戦力としてコミュニケーション能力の高い人を求めている。現場では保護者との関係が重要で、どう伝えられるかが大切である。現場を知ってもらうことは欠かせぬ要素である。
- ・美術学科の「つばさの会」でのプレゼンテーションを見せてもらった。社会に受け入れてもらうためにはデザインは重要である。食品協会としても、産学連携でデザインをする機会を増やしていきたい。
- ・即戦力として間に合う人材を求めている。夢を追いすぎる学生が多く見られる。夢を 現実にするためにも、様々な現場を見聞きし、会社訪問で先輩達が仕事をしていると ころを見てもらいたい。インターンシップも大切である。
- ・白山市もインターンシップに協力していきたい。3月には合同就職説明会を開催する ので、ぜひ参加願いたい。

以上のように、実質2年半の取組期間中、全体会議を計5回開催することができた。この他、 部会会議も5回開催し、産業界委員から数々の有益な意見を得たばかりか、人的交流を通じて、 教職員が多大な刺激を受け、ネットワークを拡げることもできたことは、今後に資する大きな財産となった。

♥. まとめ

中部圏 23 大学(18 大学・5 短期大学)は、平成 24 年度に文部科学省大学改革推進事業「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」に選定され、平成 26 年度までの 3 年間にわたり様々な事業を展開した。この取組は、中部圏 7 県にまたがる選定大学 23 校がグループを編成し、個別大学レベル、チームレベル、中部圏全体レベルの 3 つのステージで、大学間、地域・産業界との連携を図る新しい試みであった。

本学は、幸いにもその中の1校として選ばれ、初めての全学的な取組に対し、教職員が一致団結する3年間でもあった。これを運営するために、本学がこれまでの実績の中で培った産業界との信頼関係を基盤として、「産学連携人材育成研究会」という実質を伴った組織を設置することができた。このことも本取組に対する大きな推進力となった。具体的な取組実績については、総括及び各部会の報告において詳細に報告した。

最後に、もうひとつ特筆すべきことを述べたい。それは、本学が北陸チームの副幹事校を務めたことである。選定された中部圏 23 大学は、円滑運営のために、東海Aチーム(7 校)、東海Bチーム(6 校)、静岡チーム(4 校)、北陸チーム(6 校)の4 チームに分割された。

北陸チームは、北陸三県にわたる5大学及び1短期大学で構成され、しかも国公立大学、私立大学、私立短期大学というように設置形態が異なり、分野も、総合、工学系、人文系等と多岐にわたる。23大学の取りまとめは、三重大学が幹事校という名称の総リーダー役を担うことが文部科学省によって決められた。一方、各チームのまとめ役については、幹事校の決定事項となり、奇しくも本学が北陸チームの副幹事校として指名された。どの地域においても、短期大学が副幹事校の役割を担うところはなく、当初他大学から驚きの目で見られたが、時を移さず協力体制が構築され、3年間を通し、定期的な会議の開催、建設的な意見交換、各校が交替で主管する「北陸地区大学・短期大学連携FD」研修会の開催、研修会への積極的参加と懇親会などを運営することができた。

これらに加え、「北陸三県の大学を舞台とした教育力・連携力の強化」を目指し、平成25年度には、北陸における「インターンシップに関する産業界のニーズ」アンケート調査報告書を作成し、平成26年度には、「アクティブラーニングを活用した教育力の強化に関する実践報告」と「インターンシップに関する調査・分析とテーマBへの提言」をまとめた事業報告書を編集することができた。

地方にある一短期大学がこのような重責を担うことができたのは、チーム 5 大学の GP 担当者各位の寛大な理解と協力の賜であることは勿論であるが、本学においては、教職員が労を惜しまず、運営業務や編集業務等に専心努力したことに依るものであると、取組責任者として感謝の念に堪えない。

このような実績のもと、本学は、「教育力・連携力」を更に進化させていくことができると確信するものである。

文部科学省 平成24年度選定事業 【産業界のニーズに対応した教育改善·充実体制整備事業】 「産学連携人材育成研究」委員名簿

	「性子建捞人M育队研究」安貝石溥						
産学界委員							
No.	氏 名	所属機関					
1	いわかみ のぶひと 岩上 伸人	株式会社中央メディアプロ 代表取締役社長					
2	大弥 寛司	株式会社石川コンピュータ・センター 総務部長					
3	を を を を の の の の の	金沢信用金庫 常務理事					
4	かとう みっお 加藤 光男	白山市 健康福祉部子育て支援課課長					
5	^{かねこ ゆうき} 金子 雄喜	株式会社明石合銅 取締役総務部長					
6	かなやみちのり金谷道憲	株式会社シィー・プランニング 代表取締役社長 (平成26年3月退任)					
7	かわばたけいいち川畑 桂一	今村証券株式会社 総務部総務課長					
8	*************************************	株式会社木村経営ブレーン 代表取締役社長					
9	大村 竹芳	株式会社北陸サンライズ 代表取締役会長					
10	けしょう ひでお 化生 英夫	株式会社七宝商事 専務取締役					
11	でじまが出場が	株式会社トスマク・アイ 管理本部管理部長					
12	にしだ けいし 西田 敬志	株式会社宮西計算センター 監査三課 課長補佐					
13	のりちしげかつ乗地一茂勝	大生食品工業株式会社 代表取締役社長					
14	はしづめったる	有限会社フラワーガーデン 代表取締役社長					
15	はった ともゆき 八田 智之	ユニー株式会社 業務本部 人事教育部 チーフマネジャー					
16	はった よしひろ 大田 吉弘	株式会社エイトコンサルタント 代表取締役社長					
17	大田 ロ仏 はやしっとむ 林 勉	社会福祉法人恩賜財団石川県済生会金沢病院 事務部参事					
18	M 地 USabh よしのり 廣岡 吉紀	社会福祉法人石川県社会福祉協議会福祉総合研修センター研修課長					
19	原門 日和 かり かり かり かり 藤多 睦巳	能登印刷株式会社 常務取締役 営業統括部長					
20	ほっこく まさのり 北国 正則	いしかわ子育て支援財団 専務理事					
21	まえだ たけし	社会福祉法人石川県社会福祉協議会 保育部 会長					
22	前田 武司 まつおか のぶゃ 松岡 暢也	株式会社近江町ストアー(オーミ・スーパー) 専務取締役 (平成23年12月退任)					
23	まつだ えいし	白山市 産業部商工課課長					
24	松田 栄司 みやかわ まさえ 宮川 昌江	株式会社シーピーユー 代表取締役社長					
25	やまもと やすひと	財団法人いしかわ子育て支援財団専門員					
26	<u>山本 康人</u> ^{よこやま} ちかこ 横山 千賀子	社会福祉法人石川県社会福祉協議会 保育部保育士会長					
		本学推進本部委員					
No.	氏 名	所 属					
1	かとうしんいち加藤真一	本部長 理事長/学長					
2	はやしょしゆき	副本部長 副学長/幼児教育学科長/教授					
3	林 艮仙 おかの きぬえ 岡野 絹枝	副本部長 ビジネス実務学科長/教授					
4	一日 100	副本部長 事務局長					
5	かとうひろし	「教職員インターンシップによる教育改革力の向上」部会長 回知事長 / 法 1 大知長					
6	ル際 時 とうだ しゅういち 東田 修一	副理事長/法人本部長 「産業界からの要請に対する提案取組」部会長 等に受わるとない。					
7	ふじもと こういち	美術学科長/教授 「アクティブラーニング導入による汎用能力と専門能力の養成強化」部会長					
8	藤元 宏一 ゃざわ たてあき 矢澤 建明	ビジネス実務学科(学科長補佐)/教授 「産学連携ゼミナールによる考察力・発信力・チームワークカの養成強化」部会長					
9	よねかわ しょうこ	ビジネス実務学科/准教授 「育ちプログラムによる学生の人間関係力の向上」部会長					
10	米川 祥子	幼児教育学科/准教授 「地域との連携強化によるフォローアップ講座の充実」部会長					
	水上 和子	幼児教育学科/准教授 「自活のためのビジネス教養と専門教養の涵養」部会長 電話のためのビジネス教養と専門教養の涵養」部会長					
1 1 1	新井 浩	美術学科/准教授					
11	まと いかいち	「教職員のファシリテーション・スキルの養成」部会長					
12	# と しゅういち 瀬戸 就一 い ど たけひろ	ビジネス実務学科/教授 「親学通信・保護者サロンの活用による保護者の教育力向上への支援」部会長					
12	また しゅういち 就一 いど たけひろ 井戸 健敬	ビジネス実務学科/教授 「親学通信・保護者サロンの活用による保護者の教育力向上への支援」部会長 ビジネス実務学科/推教授 全体担当、幼児教育学科担当					
12 13 14	# と	ビジネス実務学科/教授 「親学通信・保護者サロンの活用による保護者の教育力向上への支援」部会長 ビジネス実務学科/准教授					
12	世 瀬戸 説一 い井戸 健敬 まつやま ても 松山 哲也	ビジネス実務学科/教授 「親学通信・保護者サロンの活用による保護者の教育力向上への支援」部会長 ビジネス実務学科/准教授 全体担当、幼児教育学科担当 事務局 企画部部長代理					

文部科学省選定

「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」

産業界と学生を"つなぐ"教育プロジェクト

事 業 報 告 書 (平成 24 年度~26 年度)

発 行 日:平成27年3月20日

編集·発行:金城大学短期大学部

〒924-8511 石川県白山市笠間町 1200

TEL 076-276-4411

FAX 076-275-4183

URL http://www.kinjo.ac.jp/kjc/

印 刷:能登印刷株式会社

産業界と学生を"つなぐ"教育プロジェクト



